

570

112



* 0053644000 *

0053644-000

570-112

雪国の春

柳田国男・著

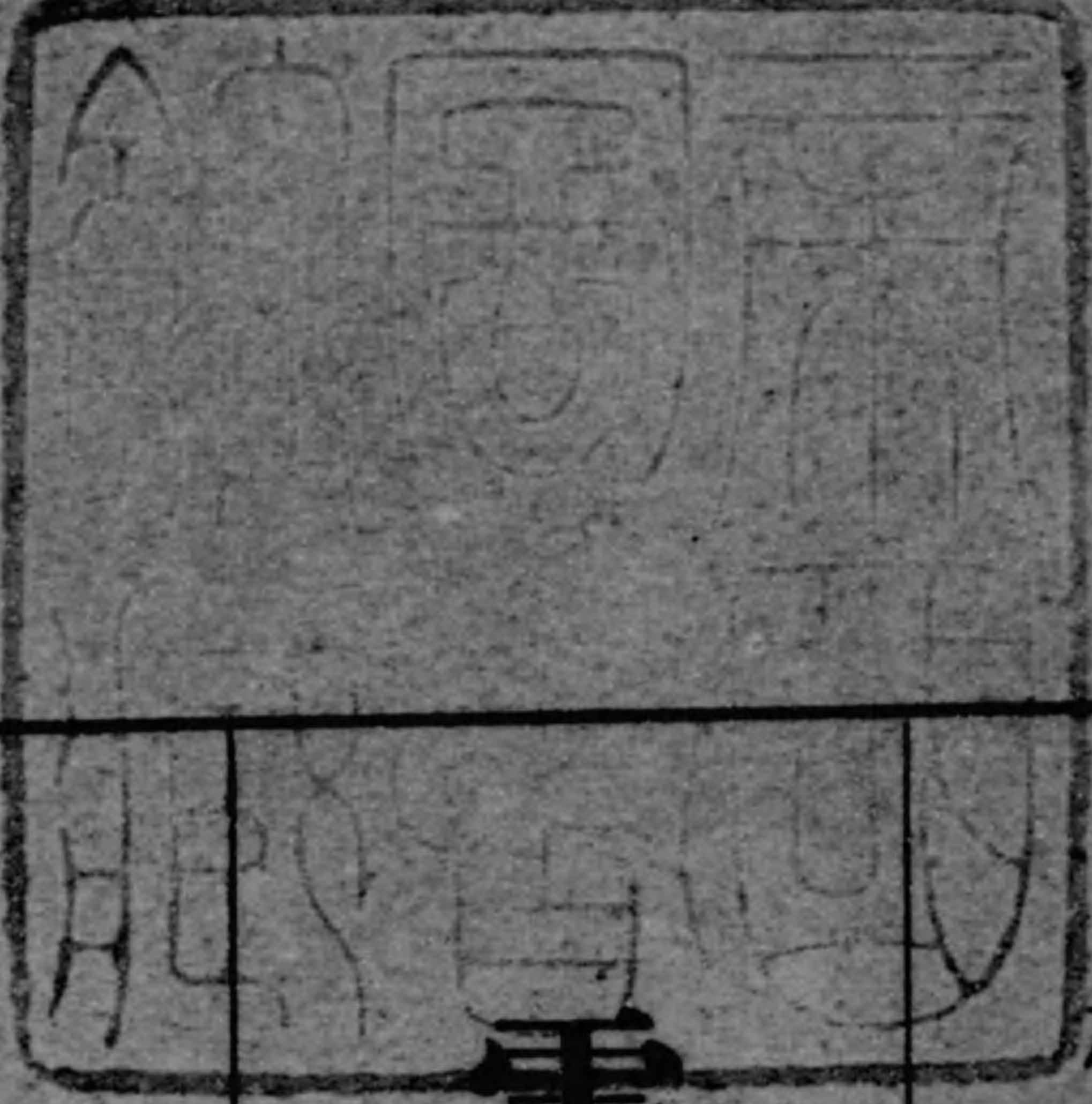
岡書院

昭和3

AIA

33.4.24

7-3063



柳田國男著

雪國の春

岡書院版





自序

二十五六年も前から殆ど毎年のやうに、北か東のごこかの村をあるいて居たが、紀行を残して置きたいと思つたのは、大正九年の夏秋の長い旅だけであつた。それを「豆手帖から」と題して東京朝日に連載したのであつたが、ごうも調子を取りにくいので中程から止めてしまつた。

再び取出して讀んで見ると、もうをかしい程自分でも忘れて居ることが多い。今一度あの頃の氣持になつて、考へて見たいと思ふやうなことが色々ある。最近代史の薄い霞のやうなものが、少しでも斯うして中に立つて

くると、何だか鄰の園を見る様な懐かしさが生ずる。そこで尙幾つかの雑文を取交へて、斯ういふ一卷の冊子を作つて見る氣になつたのである。

身勝手な願と言はれるかも知れぬが、私は暖かい南の方の、ちつとも雪國で無い地方の人たちに、此本を讀んで貰ひたいのである。併し此前の海南小記なども、あまりに濃き緑なる沖の島の話であつた爲に、却つて之を信越奥羽の讀書家たちに、推薦する機會が得にくかつた。當節は誰でも自分の郷土の問題に執心して、世間が我地方をどう思ふかに興味を惹かれるのみならず、他處も大凡此通りと推斷して、それなら人の事まで考へるにも及ばぬと、きめて居るのだから致し方が無い。此風がすつかり改まらぬ限り、國の結合は機械的で、知らぬ異國の穿鑿ばかりが、先に立つことは

免れ難い。私が北と南と日本の兩端の是だけ迄ちがつた生活を、二つ並べて見ようとする動機は、其故に決して個人の物ずきでは無いのである。

たゞ斯ういふ大切な又込入つた問題を、氣輕な紀行風に取扱つたといふことは批難があらうが、どんなに書齋の中の仕事にして見たくても、此方面には本といふものが乏しく、たまには有つても高い處から見たりやうなものばかりである。だから自分たちは出で、實驗に就いたので、それが不幸にして空想のやうに聽えるならば、全く文章が未熟な爲か、若くは日本の文章が、まだ此類の著作には適しない爲である。これ以上は同情ある讀者の思ひやりに任せるの他は無い。

雪
國
の
春

目次

自序

圖版説明

雪國の春	………	三
真澄遊覽記を讀む	………	三
雪中隨筆	………	六
北の野の綠	………	九

清光館哀史	………	三二七
津輕の旅	………	三四三
をがさべり(男鹿風景談)	………	三五三

東北文學の研究	………	三〇一
---------	-----	-----

一、義經記成長の時代	………	三〇一
二、清悦物語まで	………	三三一

圖版説明

一、雪國の正月

これは眞澄遊覽記の「津輕のつと」から寫した。青森縣東津輕郡中平内村大字内童子附近の實景である。この一つ一つの家には、今でも色々の仕來りと言ひ傳へこを持つて居ると云ふ。

二、豆手帖の旅

大正九年八月の初から九月の央ばまでに、著者が通つて見た路筋である。地圖が小さいので記入し得なかつたが、仙臺・野蒜・小野・石巻・女川浦・飯野川・登米・佐沼・一ノ關・岩谷堂・人首・遠野・世田米・大船渡・小友・廣田・氣仙沼・唐桑・尾崎・氣仙大島・釜石・大槌・山田・宮古・田老・小本・平井賀・曹代・野田・侍濱・鮫・八戸・野邊地・田名部・大畑・下風呂・藥研温泉・大湊・五所河原・修ヶ澤・深浦・岩崎・木蓮子・椿・能代などは、經過地の主要なるものであつた。

三、男鹿半島遊跡

二五二頁

昭和二年の五月中旬、恰も花の盛りの時に此半島に二日居た。山の若葉の美しく、山路の殊に長閑であつたところが、今残つて居る印象である。

四、男鹿の春風

三〇〇頁

これも眞澄の紀行の中から寫し取つた百四十年前の風景であるが、今日も略變つて居ない。赤神東側の登山口、眞山の村に近い岡の上から、西北を見晴らした寫生である。

雪國の春



支那でも文藝の中心は久しい間、楊青々たる長江の兩岸に在つたと思ふ。さうで無くとも我々の祖先の、夙に理解し歎賞したのは、所謂江南の風流であつた。恐らくは未だの著しい類似の、二種民族の感覺を、相親しませたものが有つたからであらう。始めて文字といふものゝ存在を知つた人々が、新たなる符號を透して異國の民の心の、隅々までを窺ふは容易の業で無い。殊に島に住む者の想像

には限りがあった。本来の生活ぶりにも少なからぬ差別があつた。それにも拘らず僅かなる往來の末に、忽ちにして彼等が美しと謂ひ、あはれと思ふものゝ總てを會得したのみか、更に同じ技巧を假りて自身の内に在るものを、彩どり形づくりに説き現すことを得たのは、當代に於ても尙異數と稱すべき慧敏である。かねて風土の住民の上に働いて居た作用が、たま／＼双方に共通なるものが多かつた結果、言はず未見の友の如くに、安々と來り近づくことが出來たと見るの外、通例の文化摸倣の法則ばかりでは、實は其理由を説明することが六つかしいのであつた。

故に日本人の遠い昔の故郷を、かのあたりに見出さうとする學者さへあつたので、吳の秦伯の子孫といふ類の新説は、論據が無くても起り易い空想であつた。獨り魚鳥の遙々と訪ひ寄るもの多く、さては樹の實や草の花に、移さずして既に

相同じいものが幾らもあつたのみならず、それを養ひ育てた天然の乳母として、温かく濕つた空氣、之を通してきら／＼と沾れたやうな日の光、豊かなる水と其水に汰り平げられた土の質までが、誠によく似た肌ざはりを幾百年とも無く、兩國の民族に與へて居たのである。人間の心情がその不斷の影響に服したのは意外で無い。

其上に双方共に、春が飽きる程永かつた。世界の何れの方面を捜して見ても、亞細亞東海の周邊のやうに、冬と夏とを前うしろに押し擴げて、緩々と温和の季候を樂み得る陸地は多くあるまい。是は素より北東の日本半分に於ては、味ひ能はざる經驗であつたが、花の林を逍遙して花を待つ心持ち、又は微風に面して落花の行方を思ふやうな境涯は、昨日も今日も一つ調子の、長閑な春の日の久しく續く國に、住む人だけには十分に感じ得られた。夢の蝴蝶の面白い想像が、奇抜

な哲學を裏付けた如く、嵐も雲も無い晝の日影の中に坐して、何をしようかと思ふやうな寂寞が、いつと無く所謂春愁の詩となつた。女性に在つては之を春怨とも名づけて居たが、必ずしも單純な人戀しさではなかつた。又近代人のアンニエのやうに、餘裕の乏しい苦悶でもなかつた。獸などならば只睡り去つて、飽滿以上の平和を占有する時であるが、人には計算があつて生涯の短かさを忘れる暇が無い爲に、寧ろ好い日好い時刻の餘りにかたまつて、浪費せられることを惜まねばならなかつたのである。乃ちその幸福な不調和を紛らすべく、色々の春の遊戯が企てられ、藝術は次第に其間から起つた。日本人は昔から怠惰なる國民ではなかつたけれども、境遇と經驗とが互に似て居た故に、力を勞せずして鄰國の悠長閑雅の趣味を知り習ふことを得たのであつた。

二

風土と季候とが斯程までに、一國の學問藝術を左右するであらうかを訝る者は恐らくは日本文獻の甚だ片寄つた成長に、まだ心付いて居らぬ人たちである。西南の島から進んで来て、内海を取圍む山光水色の中に、年久しく榮え衰へて居た人でないと、實は其美しさを感じ得なかつたやうな文學を抱へて、それに今まで國全體を代表して貰つて居たのは、必ずしも單なる盲從乃至は無關心では無いのであつた。今一つ根本に溯ると、或は此様な柔かな自然の間に、殊に安堵して住み付き易い性質の、種族であつたからといふことになるのかも知らぬが、如何なる血筋の人類でも、斯ういふ好い土地に来て悦んで永く留らぬ者はあるまい。全く我々が珍しく幸運であつて、追はれたり遁げたりするやうな問題が少しも無く

いつ迄も自分たちばかりで呑氣な世の中を樂み終せて居たうちに、馴染は一段と深くなつて、言はず此風土と同化してしまひ、最早此次の新らしい天地から、何か別様の清く優れた生活を、見つけ出さうとする力が衰へたのである。

文學の權威は斯ういふ落付いた社會に於て、今の人の推測以上に強大であつた。それを經典呪文の如く繰返し吟誦して居ると、いつの間にか一々の句や言葉に、型とは云ひながらも極めて豊富なる内容が附いてまはることになり、従つて人の表現法の平凡な發明を無用にした。様式遵奉と摸倣との必要は、たまく國の中心から少しでも遠ざかつて、山奥や海端に往つて住まうとする者に、殊に痛切に感じられた。それ故に都鄙雅俗といふが如き理由も無い差別標準を、自ら進んで承認する者が益々多く、其結果として國民の趣味統一は安々と行はれ、今でも新年の勅題には南北の果から、四萬五萬の獻詠者を出すやうな、特殊の文學が一代

を覆ふことになつたのである。

江戸のあらゆる藝術がつひ近い頃まで、この古文辭の約束を甘受して居たことは、微笑を催すべき程度のものであつた。漸く珍奇なる空想が入つて來て片隅に踞まつて居ることを許され、又は荒々しい生れの人々が、勝手に自分を表白してもよい時代になつても、やはり露西亞とか佛蘭西とかに、何かそれ相應の先型の存在することを確めてからで無いと、人も歓迎せず我も突出して行く氣にならなかつたのは、恐らくは亦永年の摸倣の癖に基づいて居る。即ち梅に鶯紅葉に鹿、菜の花に蝶の引續きである。しかもそれをすら猶大膽に失すと考へる迄に、所謂大衆文藝は敬虔至極のものであつて、今一度不必要に穩當なる前代の讀み本世界に戻らうとして居るのである。西歐羅巴の諸國の古典研究などは、人の考を自由にすることが目的だと聽いて居るが、日本ばかりは之に反して、再び捕はれに行く爲

に、昔の事を穿鑿して居るやうな姿がある。心細いことだと思ふ。だから我々だけは子供らしいと笑はれてもよい。あんな傾向からはわざと離背しようとするのである。さうして歴史家たちに疎んせられて居る歴史を搜して、もう少し樂々とした地方々々の文藝の、成長する餘地を見付けたいと思ふのである。

其話を出來るだけ簡單にする爲に、茲には唯雪の中の正月だけを説いて見るのだが、今説かうとして居る私の意見は、實は甚だ小さな經驗から出發して居る。十年餘り以前に仕事があつて、冬から春にかけて暫くの間、京都に滞在して居たことがあつた。宿の屋根が瓦葺きになつて居て、よく寝る者には知らずじまふ場合が多かつたが、京都の時雨の雨はなるほど宵曉ばかりに、物の三分か四分ほどの間、何度と無く繰返してさつと通り過ぎる。東國の平野ならば霰か雹かと思ふやうな、大きな音を立て、降る。是ならば正しく小夜時雨だ。夢驚かすと歌に

詠んでもよし、降りみ降らずみ定めなきと謂つても風情がある。然るに他のさうでも無い土地に於て、受賣して見ても始まらぬ話だが、天下の時雨の和歌は皆是であつた。連歌俳諧も謠も淨瑠璃も、さては町方の小唄の類に至るまで、滔々として悉く同じ様なことを謂つて居る。また鴨川の堤の上に出て立つと、北山と西山とには折々水蒸氣が薄く停滞して、峯の遠近に應じて美しい濃淡が出来る。はア春霞といふのは是だなど始めてわかつた。それが或季節には夜分まで残つて所謂おぼろ／＼の春の夜の月となり、秋は晝中ばかり深く立つて、柴舟下る川の面を隠すが、夜は散じて月さやか也と來るのであらう。言はゞ日本國の歌の景は悉くこの山城の一小盆地の、風物に外ならぬのであつた。御苦勞では無いか都に來ても見ぬ連中まで、題を頂戴してそんな事を詠じたのみか、たま／＼我田舎の月時雨が、之と相異した實況を示せば、却つて天然が契約を守らぬやうに感じて

居たのである。風景でも人情でも戀でも述懐でも、常に此通りの課題があり、常に其答案の豫期せられて居たことは、天台の論義や舊教のカテキズムも同様であつた。だから世に謂ふ所の田園文學は、今に至るまでかさぶたの如く村々の生活を覆うて、自由なる精氣の行通ひを遮つて居るのである。

三

白狀をすれば自分なども、春永く冬暖かなる中國の海近くに生れて、この稍狭隘な日本風に、安心し切つて居た一人である。本さへ讀んで居れば次第々々に、國民としての經驗は得られるやうに考へて見たこともあつた。記憶の霧霞の中からちらりと、見える昔は別世界であつたが、そこには花と緑の葉が際限も無く連なつて、雪國の村に住む人が氣せわしなく、送り迎へた野山の色とは、殆ど似

も付かぬものであつたことを、互に比べて見る折を持たぬばかりに、永く知らずに過ぎて居たのであつた。七千萬人の知識の中には、斯ういふ例がまだ幾らもあらうと思ふ。故郷の春と題して屢々描かれる我々の胸の繪は、自分などには眞先きに日のよく當る赤土の岡、小松まじりの躑躅の色、雲雀が子を育てる麥島の陽炎、里には石垣の蒲公英や葦、神の森の木の大が、りな藤の紫と、今日からあすへの堺目も際立たずに、いつの間にか花の色が淡くなり、樹蔭が多くなつて行く姿であつたが、この休息とも又退屈とも名づくべき春の暮の心持は、たゞ旅行をして見たゞけでは、恐らく北國の人たちには味ひ得なかつたであらう。

北國で無くとも、京都などはもう北の限りで、僅か數里を離れた所謂比叡の山蔭になると、既に雪高き谷間の庵である。それから嶺を越え湖を少し隔てた土地には、冬籠りをせねばならぬ村里が多かつた。

丹波雪國積らぬさきに

つれておでやれうす雪に

といふ盆踊の歌もあつた。之を聴いても山の冬の静けさ寂しさが考へられる。日本海の水域に属する低地は、一圓に雪の爲に交通が六つかしくなる。伊豫に住み馴れた土居得能の一黨が、越前に落ちて行かうとして木ノ目峠の山路で、悲惨な最期を遂げたといふ物語は、太平記を読んだ者の永く忘れ得ない印象である。總體に北國を行脚する人々は、冬のまだ深くならぬうちに、何とかして身を容れるだけの隠れがを見付けて、そこに平穩に一季を送らうとした。さうして春の復つて来るのを待ち焦れて居たのである。越後あたりの大百姓の家には、斯うした臨時の家族が珍しくはなかつたらしい。我々の懐かしく思ふ菅江眞澄なども、暖かい三河の海近い故郷を、二十八九の頃に出てしまつて、九五十年の間秋田から津

輕、外南部から蝦夷の松前まで、次から次へ旅の宿を移して、冬毎に異なる主人と共に正月を迎へた。山路野路を一人行くよりも、長いだけに此方が一層心細い生活であつたことゝ思はれる。

汽車の八方に通じて居る國としては、日本のやうに多く降る國も珍しいであらう。それが到る處深い谿を遡り、山の屏風を突き抜けて居る故に、かの

黄昏や又ひとり行く雪の人

の句の如く、折々は往還に立つてちつと眺めて居るやうな場合が多かつたのである。停車場には時としては暖國から來た家族が住んで居る。雪の底の生活に飽き飽きした若い人などが、何といふ目的も無しに、鍬を揮うて庭前の雪を掘り、土の色を見ようとしたといふ話もある。鳥などは食に飢えて居る爲に、殊に簡単な方法で捕へられた。二三日も降り續いた後の朝に、一尺か二尺四方の黒い土の肌

を出して置くと、何の餌も囿も無くてそれだけで鴨や鵜が下りて来る。大隅の佐多とか土佐の室戸とかの、茂つた御崎山の林に群れて囀りかはして居たものが、僅かばかり飛び越えるともう此様な國に来てしまふのである。

我々の祖先が曾て南の海端に住みあまり、或は生活の鬭争に倦んで、今一段と安泰なる居所を覓むべく、地續きなればこそ氣輕な決意を以て、流れを傳ひ山阪を越えて、次第に北と東の平野に降りて來た最初には、同じ一つの島が斯程までに冬の長さを異にして居ようとは、豫期しなかつたに相違ない、幸ひにして地味は豊かに肥え、勞少なくして所得は元の地に優り、山野の樂みも夏は故郷よりも多く、妻子眷屬と共に居れば、再び窮屈な以前の群に、還つて行かうといふ考も起らなかつたであらうが、秋の慌たゞしく暮れ春の來ることの遅いには、定めて暫らくの間は大きな迷惑をしたことと思ふ。十和田などは自分が訪ねて見た五

月末に、雪を分けて僅かに一本の山櫻が咲かうとして居た。越中の袴腰峠、黒部山の原始林の中では、共に六月初めの雨の日に、まだ融けきらぬ残雪が塵を被つて、路の傍に堆かく積んで居た。舊三月の雛の節句には、桃の花は無くとも田の泥が顔を出して居ると、奥在所の村民は來て見て之を羨んだ。春の彼岸の墓參りなどにも、心當りの雪を掻きのけて、僅かな窪みを作つて香花を供へて還るといふ話が、越後南魚沼の町方でも語られて居る。あの世に往つて住む者にも淋しいであらうが、此世同士の親類朋友の間でも、大抵の交通は春なかば迄猶豫せられ他國に旅する者の歸つて來ぬことにきまつて居るは勿論、相互ひに燈の火を望み得る程の近隣りでも、無事に住んで居ることが確かなる限りは、訪ひ訪はれることが自然に稀であつた。峠の双方の麓の宿場などが、雪に中斷せられて二つの囊の底となることは、常からの片田舎よりも尙一層忍び難いものらしい。だから銘

銘の家ばかりを最も暖かく、成るだけ明るくして暮さうとする努力があつた。親子兄妹が疎み合うては、三月四月の冬籠りは出来ぬ故に、誰しもこの小さな天地の平和を大切に、いつかは必ず来る春を静かに待つて居る。斯ういふ生活が寒い國の多くの村里では、略人生の四分の一を占めて居たのである。それが男女の氣風と趣味習性に、大きな影響を與へぬ道理は無いのであるが、雪が降れば雪見など、稱して門を出で、山を望み、若くは枯柳の風情を句にしようとする類の人々には、ちつとも分らぬまゝで今迄は過ぎて來たのである。

四

燕を春の神の使として歓迎する中部歐羅巴などの村人の心持は、似たる境遇に育つた者で無いと解しにくい。雪が融けて始めて黒い大地が處々に現れると、す

ぐに色々の新らしい歌の聲が起り、黙して叢の中や枝の陰ばかりを飛び跳ねて居たものが、悉く皆急いで空に騰がり、又は高い樹の頂上にとまつて四方を見るのだが、其中でも今まで見かけなかつた輕快な燕が、わざ／＼里近く駆け廻つて、幾度か我々をして明るい青空を仰がしめるのを、人は無邪氣なる論理を以て、縁が此鳥に導かれて戻つて來るものゝ如く考へたのである。春よ還つて來たかの只一句は、何度繰返されても胸を浪打たしむる詩であつた。嵐吹雪の永い淋しい冬籠りは、ほゞ／＼過ぎ去つた花の頃を忘れしめるばかりで、もしか今度は此儘で雪の谷底に閉されてしまふので無いかといふ様な、小兒に近い不安を味つて居た太古から、引續いて同じ鳥が同じ歡喜をもたらして居た故に、之を神とも幸運とも結び附けて、飛ぶ姿を木に刻み壁に書き、寒い日の友と眺める習ひがあつたのである。さうして是とよく似た心持は、亦日本の雪國にも普通であつた。

即ち此の如くにして漸くに迎へ得たる若春の悦びは、南の人の優れたる空想をさへも超越する。例へば奥羽の處々の田舎では、碧く輝いた大空の下に、風は軟かく水の流れは音高く、家にはちつとして居られぬやうな日が少し續くと、ありとあらゆる庭の木が一齊に花を開き、其花盛りが一どきに押寄せて来る。春の勞作はこの快い天地の中で始まるので、袖を垂れて遊ぶやうな日とては一日も無く惜いと感歎して居る暇も無いうちに、艶麗な野山の姿は次第々々に成長して、白くどんよりとした薄霞の中に、桑は延び麥は熟して行き、やがて閑古鳥が頻りに啼いて、水田苗代の支度を急がせる。この活き／＼とした季節の運び、それと調子を合せて行く人間の力には、實は中世のなつかしい移民史が匿れて居た。其歴史を滲み透つて來た感じが人の心を温めて、旅に在つては永く家郷を懷はしめ、家に居ては冬の日の夢を豊かにしたものであつたが、單に農人が文字の力を備ふ

ことをしなかつたばかりに、其情懷は久しく深雪の下に埋もれて、未だ多くの同胞の間に流傳することを得なかつたのである。

五

さうして又日本の雪國には、二つの春があつて早くから人情を錯綜せしめた。ずつと南の冬の短かい都邑で、編み上げた曆が彼等にも送り届けられ、彼等も亦移つて來て幾代かを重ねる迄、其曆の春を忘れることが出来なかつたのである。全體日本のやうな南北に細長い山勝ちの島で、正朔を統一しようとするものが實は自然でなかつた。僅かに月の望の夜の算へ易い方法を以て、昔の思ひ出を保つことが出來たのである。然るに新らしい曆法に於ては、更に寒地の實狀を省みること無くして、又一月餘の日數を去年から今年へ繰入れたのである。是が西洋の

人のするやうに、正月を冬と考へることが出来たならば、其不使も無かつたのか知らぬが、祖先の慣習は法制の感化を以て自然に消滅するものと豫測して、なまじひに勧誘を試みようとしなかつた爲に、終に斯ういふ雪國に於ても、尙正月は即ち春と、固く信じて渝らなかつたのである。

東京などでも三月に室咲きの桃の花を求めて、雛祭りをするのを侘びしいと思ふ者がある。去年の柏の葉を鹽漬にして置かぬと、端午の節供といふのに柏餅は食べられぬ。九月は菊がまだ見られぬ夏休の中なので、もう多くの村では重陽を説くことを止めた。盆も七夕も其通りではあるが、僅かに月送りの折合ひに由つて、馴れぬ闇夜に精霊を迎へようとして居るのである。併し正月となると更に今一段と大切なる賓客が、雪を踏み分けて迎へられねばならなかつた。正月様とも歳徳神とも福の神とも名づけて、一年の福運を約諾したまふべき神々がそれであ

つた。曆の最初の月の満月の下に於て、是非とも行はれねばならぬ儀式が幾つでも有つた。人も知る如く此等の正月行事は、一つとして農に關係しないものは無かつた。冬を師走の月を以て終るものとして、年が改まれば第一の月の三十日間を種粃よりも農具よりも、遙かに肝要なる精神的の準備に、捧げようとしたのであつて、即ち寅の月を以て正月と定めた根源は、昔もやはり温かい國の人の經驗を以て、寒地の住民に強ひたことは同じであつた。澤山のけなげなる日本人は、其曆法を固く守りつゝ、雪の國までも入つて來た。白く包まれた廣漠の野山には、一筋も春の萌しは見えなかつたけれども、神は尙大昔の契約のまゝに、定まつた時を以て御降りなされることを疑はず、乃ち冬籠りする門の戸を押開いて、欣然としてまぼろしの春を待つたのである。

もしも新たに自分の爲に發明するのであつたら、恐らく此様な不自然不調和を

受入れることはしなかつたであらう。邊土の住人が世間の交りが絶えると、心安い同士の間には身嗜みの必要も無くて、鬚を構はなかつたり皮衣を著たり、何か荒々しい風貌を具へて来るのを見て、時としては昔袂を別つた兄弟であることを、忘れようとする人たちもあつたが、假に何一つ他には證據の無い場合でも、かほご迄民族の古い信仰に忠實で、天下既に春なりと知る時んば、我家々の苦寒は顧みること無く、又何人の促迫をも待たずして、冬の只中にいそぐと、一年の農事の支度に取りかゝる人々が、別の系統から入つて來た氣づかいは無い。

或は今日の眼から見れば、そんなに迄風土の自然に反抗して、本來の生活様式を墨守するにも及ばなかつたのかも知れぬが、同じ作物同じ屋作りの、何れも南の島にのみ似つかはしかつたものを、兎に角にこの北端の地に運んで來て、辛苦の末に漸く新たなる環境と調和せしめたのみか、尙出來るならば西伯利亞にも勘

察加にも、はた北米の野山にも移して見ようとする、それが寧ろ笑止なる此國人の癖であつた。曾て中央日本の溫和の地に定著して、こんなよく調和した生活法が又と他にあらうかと悦んだ満足が、或は無用に自重心を培養した結果でもあらうか。何にもせよ曆の春が立返ると、西は筑紫の海の果から、東は南部津輕の山の陰に及ぶまで、多くの農作の行事が殆ど些かの變化も無しに、一時一樣に行はるゝは今猶昨の如くであつて、しかも互に鄰縣に同じ例のあることも知らぬらしいのは、即ち亦此等の慣習の久しい昔から、書傳以外に於て持續して居たことを意味するもので無くて何であらう。

六

爰に其正月行事の一つくを、列擧して見ることは自分には六つかしいが、例

へば田畠を荒さうとする色々の鳥獸を、神靈の力の最も濃かなりとした正月望の日に、追ひ拂うて置く一種の呪法がある、鳥追ひの唄の文句には後に若干の増減があつたが、ムグラモチを驚かす槌の子の響き肥桶のきしみ、之に附け加へた畏嚇の語の如きは、北も南も一樣に簡明であつて、たゞ奥羽越後の諸縣では凍つた雪の上を、あるくばかりが西南との相違である。此日の小豆粥を果樹に食べさせ片手に鎌鉞などを執つて恩威二つの力を以て、なるかなるまいかを詰問する作法なども、雪國の方の特色といへば、雪が樹の根に堆かくして、眞の春になつてから粥を與へた鉞の切口が、手の届かぬ程の高い處になつて居るといふだけである。圍爐裏の側に於て試みられる火の年占が、或は胡桃であり栃の實であり又粟であり大豆であり、粥占の管として竹も葦も用ゐられて居るのは、單に手近に在るものを役に立てるといふのみである。粟穂稗穂の古風なるまじなひから、家具農具

に年を取らせる作法までが一つであつた。綱曳の勝負も亦年占の用に供せられた。二種の利害の相容れぬものが土地に有れば、優劣の決定を自然に一任して、之を神意と解したのであるが、若し一方に偏つた願ひがあるとするれば、結局は他の一方が負けることに仕組まれてあつた。雪深き國の多くの町で正月十五日に之を行ふ他に、朝鮮半島に於ても同じ日を以て此式があり、南は沖繩八重山の島々にも、日はちがふが全然同じ勝負が行はれて居た。

或は同じ穀祭の日に際して、二人の若者が神に扮して、村々の家を訪れる風が南の果の孤島にもあつた。本土の多くの府縣では其神事が稍弛み、今や小兒の戯れの如くならうとして居るが、是も亦正月望の前の宵の行事で、或はタビタビトビトビと謂ひ、又はホト／＼コト／＼など、戸を叩く音を以て名づけられて居るといふ差があるのみで、神の祝言を家々にもたらず目的は則ち一つである。福

鳥宮城では之を笠鳥とも茶せん子とも呼んで居る。それが今一つ北の方に行くに、却つて古風を存することは南の海の果に近く、敬虔なる若者は假面を被り、藁の衣裳を以て身を包んで、神の語を傳へに来るのであつて、殊に怠惰逸樂の徒を憎み罰せんとする故に、之をナマハギともナゴミタクリとも、又ヒカタタクリとも稱するのである。閉伊や男鹿島の荒蝦夷の住んだ國にも、入代つて我々の神を敬する同胞が、早い昔から邑里を構へ、満天の風雪を物の數ともせず、伊勢の曆が春を告ぐる毎に、出で、古式を繰返して歳之神に仕へて居た名残である。

初春の祭の更に著しい特徴には、異國のクリスマスなども同じ様に、神の木を飾り立てる習ひがあつて、是も弘く全國に亙つて共通であつた。餅團子の根本の用途は、主として此木の裝飾に在つたかと思はれる。飾ると言ふよりも其植物の實を用ゐる姿を假りて、一年の豊熟を豫習せしめようとするのであつて、即ち

一種のあやかりの法術であつた。今日は最初の理由も知らず、單に此木を美しく作り立てる悦ばしさのみを遺傳して居る。家の内の春は此木を中心として榮えるが、更に外に出ると門口にも若木を立て、それから田に行つても亦茂つた樹の枝を挿して祝した。此枝の大いに茂る如く、夏秋の稔りも豊かなれと祈願したものであるが、雪の國では廣々とした庭先に畝を劃して、松の葉を早苗に見立て、田植のわざを真似るのが通例であつた。稻はもと熱帯野生の草である。之を瑞穂の國に運び入れたのが、既に大いなる意思の力であつた。況んや軒に届く程の深い雪の中でも、尙引續いて其成熟を念じて居たのである。さればこそ新らしい代になつて、黒龍江の向ふの岸邊にさへ、米を作る者が出來て來たのである。信仰が民族の運命を左右した例として、我々に取つては此上も無い感激の種である。山の樹の中では松の葉が最も稻の苗とよく似て居る。雪に畏れぬ緑の色をめ

て、前代の北方人が珍重したのも自然であるが、しかも斯様な小さな點まで、新たな作法の發明でなかつたことは、正月の祭に松を立てるといふ慣習の、此方面のみに限られて居なかつたのが證據である。子の日と稱して野に出で、小松を引き、之を移植する遊びは朝家にも採用せられた。但し大宮人が農事には疎かつた爲に、何の目的を以て小松を引栽るか迄は、歌にも詩にも一向に説いて居ないが、多分は山城の都の郊外にも、之を農作の呪法とした農民が住んで居たので、北日本の兄弟たちは只其習俗を携へつゝ、北へ北へと進んで行つたのである。

しかし雪國の曆の正月には、月は照つても戸外の樂みは少なかつた。群の力と酒の勢ひとを借りて、或程度までは寒さと争つては居るが、後には家の奥に引込んで、物作りの樹の周圍に笑ひさゞめくの他は無かつた。さうして此等の行事が一つ一つ完了して、再び眞冬の淋しさに復歸することは、馴れて後までも忍び難

いことであつたらうが、幸ひにして家の中には明るい圍爐裏の火があり、其火のまはりには物語と追憶とがあつた。何もせぬ日の大いなる活動は、恐らくは主として過去の異常なる印象と興奮との叙述であり、又解説であつたらうと思ふ。即ち冬籠りする家々には、古い美しい感情が保存せられ培養せられて、次々の代の平和と親密とに寄與して居たのである。其傳統が行く／＼絶えてしまふであらうか。はた又永く語り得ぬ幸福として續くかは、結局は雪國に住む若い女性の、學問の方向によつて決定せられ、彼等の感情の流れ方が之を左右するであらう。男子が段々と遠い國土に就いて、考へねばならぬ世の中になつた。雪國の春の静けさと美しさとは、永く彼等の姉妹の手に、其管理を委託せられて居るのである。

(大正十四年一月、婦人の友)

眞澄遊覽記を讀む

一

菅江眞澄本名は白井英二秀雄。天明の初年に二十八で、故郷の三河國を出てしまつてから、出羽の角館で七十六歳を以て歿する迄、四十八回の正月を雪國の雪の中で、次々に迎へて居た人である。此人の半生の旅の日記が、後に眞澄遊覽記と題せられて、今は四十巻ばかり、散在して諸國の文庫に遺つて居る。非常に精密な彩色の自筆畫が添へられ、それを文章の説明の補助にした爲に、却つて此紀

行の流布を妨げた形のあつたのは、この親切なる平民生活の觀察者に對して、言はう様も無い不本意なことであつた。

久しい以前より自分は此人の舊知の家を尋ね、殊に三河の本國の村里を物色して、どうして斯ういふ寂しくも又骨折な生涯の旅行が始まつたかを知らうとして居るのだが、まだ生れた家の所在すらも明かにならぬ。繰返して彼の紀行を讀んで見ると、何かあの時代としては珍しい事情があつて、かゝる遠國の大雪の底に空しく親を懐ふ百篇の歌を、埋めるに至つたことは想像し得られるが、遊覽記はさういふ身の上話をするやうな私事の日記では無かつたのである。雪國の春を校正する片手に、ふと心付いて拾ひ讀みに、再び幾つかの卷の正月の條を出して見たが、精彩ある村々の初春行事よりも、尙鮮かに自分の眼に浮ぶのは、圍爐裏の片脇に何の用も無くて、ぼつんとして見て居る菅江眞澄の姿であつた。年越の宵

曉は主人は神祭りに、刀自は食べ物の用意に餘念も無い時刻であつて、今年ばかりの遊歴の文人に、手傳つてもらふ仕事は一つも無いばかりか、落ちく〜と話の相手になる者もあつた筈が無いのである。外がきら〜と霽れた日でもあれば、出で、山を望み雀の聲を聴きもしたが、吹き荒れて居る時はしよう事も無い。回禮の客人には氣樂な話すきがあつても、眞澄は酒のきらひな幾分か生眞面目な人であつた。故郷の新年を考へ出さずには居られなかつたことゝ思ふ。

二

遊覽記初卷の「伊那の中路」に依れば、天明三年の春までの紀行は、或渡し場の舟が覆つて、流してしまつたと謂つて居る。

天明四年の正月は信州諏訪近くで迎へたらしい。「諏訪の海」といふ一卷があつ

たといふが、是はまだ何處からも出て來ない。此六月には洗馬から出發して、戸隱に參詣して七月末に北信に向つたことが、「來目路の橋」といふのに詳しく記してある。それから越後を通つて九月にはもう鼠ヶ關に來て居るから、此地では腰を落付けて休む家もなかつたのである。「鱒田の刈寢」は九月以後の日記である。羽黒の三山に登つて酒田に出で、吹浦象潟を見物して矢島に入り、烏海の北麓では十月もまだ月始めに、早ひごい風雪に遭つて居るのである。それから山を越えて雄勝郡の西馬音内に遊び、次の月には柳田村の草薙氏の家で、引留められて冬を過すことになつた。道を行く男女目すだれといふものを掛けて、雪に眼を傷めることを防ぐと書いてある。

雪の正月の第一回の記録は、この雄勝郡の柳田から始まつて居る。「小野の古里」といふのが其日記の名であつた。東海道の故郷の村と比べると、異なつた風習

が幾つともなく目に著いた。粟穂稻穂は信州なごゝもちがつて、此邊のは餅を以て其形を作つた。オカの餅といふのが奥羽の各地の習ひであつたが、餅を瓢箪の形に中凹みに平めて、家内の男子の數だけこしらへて神に供へた。歳棚の上ではオケラといふ植物の根を焚き、其煙を衣類などにたき籠めて、悪い病を除けるといふ仕來りがあつた。七日の粥の日には村の内の子供たちが、祝言を述べて物を貰ひに來る風があつた。瘦馬と名づけて松の葉に少しの穴錢を貫き、この馬瘦せて候と言つて與へたとある。十四日の晩は「又の年越」と謂つて、門毎の雪に柳の枝を折つて挿した。次の朝の鳥追ひは他の地方も同じであつたが、此邊では餅花を鳥追菓子と名づけて、犬猫花紅葉色々の形に彩色した餅を、重箱に入れて互に贈答した。夜に入つてからは例の十二ヶ月の年占があつた。此邊で行はれた方式の一つは、田結びと稱して十二本の藁を把り、其中程を隠して端の方を二本づゝ

結び合せる。偶然に長く繋がるのを田が廣いと謂つて、其年豊作の兆として悦んだとある。餅焼きといふのも元は年占であつたらうが、もう此頃から之を縁結びの戯れに應用して居る。餅を小さく切つて男女を定め、それを爐の片脇に並べて置くと、焼けてふくれていつと無く近づくのを、それ男が寄つて來たとかこれは女の方から手を出したとか謂つて、娘たちが笑ひごよめいたと書いてある。焼餅を焼くといふ語が嫉妬を意味するのも、多分は昔行はれた此遊戯が元であらう。

三

この天明五年は眞澄が一生の中でも、最も多く旅行した年であつた。四月も終りに近く野は霞み郭公の頻りに鳴く頃に、彼は雄勝の詞友たちと別れて、川岸傳ひに北をさして旅立つた。夏は恐らく久保田の城下に居たらうと思ふが、其日記も

まだ出て來ない。「外が濱風」けふのせば布」の二書は、この八月初めから二ヶ月の旅中記であるが、彼は其間に津輕を一巡し、再び引返して北秋田鹿角から、嶺を東に越えて北上川の岸を、江刺郡の岩谷堂の近くまで下つて居る。是は我旅人の銳氣の盛り、北の世の中の極端に悪い頃であつて、色々と心を動かす話があるのだが省略する。次の天明六年は南部領で正月をした筈であるが、此一年餘りは事蹟が傳はつて居らぬ。秋の末から冬にかけての日記は、「雪の膽澤邊」といふ簡單な一冊が遺つて居る。師走の雪の頃まで、一ノ關近くの山の目の大槻氏、膽澤郡徳岡の村上氏の家などに居たといふので、七年の正月も爰で迎へたことゝ想像するばかりである。

天明七年には更に陸前に入つて來て、石巻から松島、仙臺までも見物をした様子だが、是れも記録が果してあるかどうか。現在まではまだ少しも知られて居ら

ぬ。兎に角に此暮のうちには、もう膽澤郡に引返して居た。さうして舊知の村上家に客となつて、次の初春を迎へたことは、「霞む駒形」といふ一卷が見付かつた爲に、此頃漸く明かになつたのである。

四

徳岡は自分の地圖には見えぬが、前澤の町に近い小部落の名であつた。斯ういふ村々の百四十年前の正月が、目に見るやうに詳しく傳はつたのは、珍重すべきことだと思ふ。二日の朝は子供たちが年禮に来るのに、瘦馬と稱して松の小枝に錢をさして與へることは、出羽の雄勝の村も同様であつて、此邊では之を戯れて馬に乗せると謂つて居た。明き方といふことは雷様の年を越した方角のことでそれに由つて村老は又田作りの豊凶を卜した。年を越すとは昨冬の雷鳴が、其方

面に聽えたといふこと、思ふが、近世の曆の八將神の物々しい名前なども、やはりかういふ民間の古い習はしから、出て居たことが考へられるのである。三日は申の日であつたので、家々の馬を引出して遊ばせた。駒形山の支配する土地だけに、馬の神の祭はをろそかで無かつた。六日が節分で豆焼きの灰占は爐端に行はれた。豆をまくことも他の地方と同じであつたが、此邊の唱へ詞は

天に花さけ地にみのれ

福は内へ鬼は外へ

といふのであつた。今でもさういふ老人などがあるかどうか。尋ねて見たならば面白いであらう。七日の朝は此土地では白粥に豆を入れたもので、七草をはやすといふのは色々の食器を俎板に置いて、それをマハシ木(播木)で叩くことであつた。若菜を得る途は雪の村には無かつたのである。十一日はハダテと稱して、仕

事初めの日であつた。雪の上に畝を立て、薄の穂や藁などを挿し、あゝくたびれたと冗談をいふ者もあれば、小苗打ちごうしたなど、小兒等に戯れて、歌をうたひ又酒を飲んだ。

所謂カセギドリの遣つて来るのは、此村などでは十二日の午前からであつた。ケンダイと稱する藁製の藁笠を著た様子から、雞のことだと考へて居た者が多く遁げて還るときにケケロと鳴いて見たり、他村の群と途中で逢つた時は、雌鳥か雄鳥かと先づ尋ねて、雄鳥といへば蹴合ひをしようといつて掴み合ひ、雌鳥と答へば卵を取らうといつて貰つた餅を奪ひ合つた。主人が憎まれて居る家ばかりはカセギドリの若い者が入つて来て暴れ、厩の前に在る木櫃を伏せて、杖で其底を突立て、スハクへ〜と謂つた。其言葉の意味はもう不明であつたが、尙老人たちは此訪問者の服装が案山子とよく似て居り、其身に著けた鳴子鳴りがね馬の鈴

木貝と名づくる喇叭のやうな樂器などが、鳥追ひ鹿追ふ秋の田の設備と同じいものを見て、是は田の神の姿であり、スハクへは其呪文の如きものなることを、想像して居たらしい様子である。此役は大抵若い男が、願掛けまじなひの爲に勤めるものであつた。例へば重病で死にかゝつた者などが、幸ひに本復しますれば來年はカセギドリに出ますと謂つて、村の鎮守の社に禱るのは普通であつて、それ故に折々は三十から四十に近い人が、此群に加はつて餅貰ひに來ると記してある。十五日は黄金餅と稱して、粟の餅を搗く習があつた。家によつては十一日の物ハダテ即ち雪の上の田植を、此朝執行ふ例もあつた。山島の雪の中に高い柱を立て、一方には杭を打つて其間に繩を張り、ヒサグワクといふ麻絲の糸巻、瓢箪などをつり下げた處もあつた。杭の頭には古草履古藁鞋の類を、幾らとも無く縛りつけてあつたといふ。

五

斯うして端から書抜くと長くなるが、眞澄のやうに方々の正月を、一人で見てあるいた人は無いのだから、殊に其觀察には教へられることが多い。仙臺の近村で今も行はるゝ田植踊、所謂彌十郎藤九郎のエンブリ摺り一行は、徳岡の村では十八日の朝やつて來た。本來はカセトリの群から分化したものと、自分等は推測して居るのだが、もう此時代から此地方でも伎藝となつて、之を業とした部曲があつたらしい。田植の祝言の中には注意すべき文句が多かつた。例へば早乙女には妊婦を悦んだ心持が述べてある。田人の一行の中には瓢箪の片割れに、眼鼻を彫り白粉を塗つたものを、被つて來る者もあつたといふ。つひ此間幸田先生から朝鮮のヒョットコだと言つて贈られたのが、やはりこの瓠製の素朴なものであつ

た。此箇條を讀んだのは恰もその次の日であつて、思はず顧みて棚の上の朝鮮の面と、顔を見合せて笑つたことであつた。

此年の日記にはまだ色々の話の種があるが、前を急ぐ故に今は皆省略する。次の寛政元年は陸中の東山、大原の近くなどで正月をしたものであらうか。夏に入つて六月の上旬に愈々此邊を立つて、再び北上の路に就いた。其紀行が「岩手の山」である。野邊地の馬門から狩場澤へ、南部領から津輕領へ、入つて來たのが七月六日、それから青森を過ぎ内灣の岸づたひに、三厩から宇鐵へ出て便船を求め、盆の魂迎へに飢饉で死んだ親姉の名を、頻りに喚んで居る夜半の時刻、松前を、して渡海したことが、「外が濱づたひ」といふ一卷には述べてある。

松前滞在の日記は五種ほご今あるが、其間がきれて居て踪跡が明かで無い。彼と稍似た境遇の漂泊者が、或は信仰を種とし或は文學によつて、幽かに生活の便

宜を得て居たこと、口蝦夷の外部文化に觸れて居るアイヌ等が、尙半ば仙家の如く取扱はれて居たことなど、新らしい印象は幾つもあるが、殊に珍しいのは松前城下の正月の記事であつた。

それは寛政四年子の春の日記で、標題を「千島の磯」と記して居る。此時は眞澄は大館山の麓の、天神社の脇に借宅をして、淋しい獨身生活をして居たが、餘りに雪が深いので外の正月も森閑として、折々は城内の士人の歌の會などに往來しても、眼につくやうな街頭の行事は無かつたやうである。五日には城中に萬歳を舞はしめらるべしとあつて、折ふし來合せて冬籠りをする旅役者澤田の某といふ者が、臨時に萬歳になつて召されたと記してある。十四日の宵のみは町家にも儀式があつた。子供が手に持つて唱へ言を述べあるく短い杖を、松前ではゴイハヒ棒と謂つた。即ち羽後飛島のヨンドリ棒、越後の道祖神など、一つのもので、古

くから此方式ばかりは日本人が、如何なる雪の國にも持つて行かずには居られなかつたことが想像せられる。

六

この寛政四年の十月始めには、丸三年の蝦夷滞在を終つて、引返して外南部の奥戸（オコツペ）の湊に上陸した。それから二年半ほどの間が、下北半島の小天地の生活であつた。此地方の正月記事は、幸ひに「奥の手振」といふ寛政六年のものが、殆ど之を我々に傳へんとして用意して置いたかの如く、晝も文章も完備して残つて居る。奥州の果まで來て見ると、いよ／＼盆と正月との二つの行事が、もとは毎半年に繰返された同じ儀式であつたことが分る。除夜にはサイトリカバと謂つて、白樺の皮を門火に焚くことは、他の山國の盆の夕も同じであつた。年棚

にはミタマの飯といふものを作つて、祖先の靈にさゝげた。眞澄も手づから其土地の風を習つてさうしたと謂つて居る。節分の豆まきには松の葉と昆布の刻んだのをまじへて撒いた。松は門にも立てたらしいが、先づ一本を家の内の大柱に結んで立て、それに餅だの鮭の魚だのを供へた。南部には私大があつて一日づゝおくれ、七草は即ち八日の日の行事であつた。鹽に貯藏した筍と芹の葉を入れたとある。十一日はやはり仕事始めで、大畑の湊には船玉の祝があり、初町が立つて鹽と飴と針とを賣つた。

十三日には目名といふ村の獅子舞が來て家々をまはつた。熊野の御札と御幣とを中に立て、山伏が演ずる純乎たる祈禱の式であつた。獅子頭は瓢箪を口に咥へて、其中から水を散らしたり、又は柱や障子を噛みまはる眞似をして、

此屋の四方のます鏡

いのれば神もいはひとごまゐる

なごゝ、聲々に唱へたと記して居る。十四日の夕方になると、爰でも膽澤あたりとよく似たカセギトリが遣つて來る。春田打つ男の人形を作つて、之を盆に載せて手に持つた少年が

春の初めにかせぎとりが参りた

と謂ひながら入つて來て、ごちの方から、明きの方からといふ問答の後に、餅なごを貰つて還つて行つた。關東以西の柊の枝に鯛の頭は、節分の夜の行事となつて居るが、爰ではこの十四日の年越に、魚の鱗魚の皮なごを焦して餅と共に串に刺し、すべての入口、窓といふ窓に挿んで、それをやはり亦ヤラクサと呼んで居た。つまり臭氣ある物を以て、鬼を追返さうといふ目的に出たのである。八戸なごでいふエンブリを、此邊では仙臺なごゝ同じに田植と謂つて居る。十五六日の

二日、幾群とも無く廻つて來た。杵を摺る男の名を藤九郎といひ、謠ふ歌は田植唄であつた。

正月のこいはひに

松の葉を手に取持ちて、祝ふなるものかな

是は誰がほうたんだ

えもとさえもがほうたんだ

一本植ゑればせんぼになる

かいこの早稻の種かな、ほいく

と唱へて其エブリを摺つた。松前でゴイハヒ棒と謂つたのも、多分は同じ田植舞が、彼地に移されて居たものであつた。十五日に女の子が雛を祭る習ひがある。是も松前と似て居ると記してある。注意すべき古風である。

七

この地で今一回の正月を過して、翌寛政七年の三月央ばに、我々の旅人は外南を去つたやうである。近年中道等君の發見した「津輕の奥」といふ一巻には、野邊地の馬門から關所を越えて、狩場澤小湊と海沿ひの往還を、久しぶりに通つたといふ紀行の次に、淺虫の温泉で正月をしたといふ日記があつて、それが同八年のことであつた。但し此時は湯の宿の閑居であつた爲に、稍世間に疎く歌ばかり多く詠んで居たが、それでも附近の農民が十一日の仕事初めに、肥しを田畠に引く儀式が、如何にも實際的なまじなひであることを記した他に、十三日からは小湊の町に遊びに来て、詳しく小正月の行事を見て居る。此朝は粥が濟んで後に、例の雪の上の田植があつた。下北半島のヤラクサの代りに、小湊で行ふ儀式は節

分の豆まきの起原を思はしめる。即ち酒の糟と糠と豆の皮と、此三つの品を楯に入れて、次の詞を唱へつゝ家の周圍にまき散らした。

豆のかはほんがく

錢も金も飛んで來い

福の神も飛んで來い

是は今でもヤラクロなど稱して、南部の各村には似たる唱へ言の用ゐらるゝ例が多い。或は古酒の香がするなども謂ふが、つまりよき香を以て福の神を内に誘ひ、いやな香を以て鬼を外へ追出さうといふのである。カセギドリは津輕ではカバカバと謂ふが、此頃は尙バカバカともいふ土地もあつたらしい。田打男の形をヲシキに載せ、小さな木の棒で其底を敲くのが習はしで、バカバカは音から出た名稱であつたやうだ。小湊などでも女の兒は家々に入つて來て、

春の始めにそとめが參つた

といひ、男の兒はタヂドが參つたと謂つて、錢を貰つてガラコに入れて還つたところから、もう此邊では大人の儀式では無くなつて居たのである。之に反して鳥追ひは十六日の拂曉に、笛や太鼓のいかめしい拍子を取つて、最も嚴重に行はれて居た。此時の唱へごとゝして眞澄の手記して居るものは、次のやうな文句であつた。

朝鳥はより、夕鳥はより

長者ごのゝかくちは

鳥は一羽も居ないかくちは、よりく

此から處々を行きめぐつて、寛政九年の正月には西津輕郡深浦の湊に居たことが、「津輕のをち」といふ日記に見えて居る。日本海岸の方まで來ると、もう秋田

傾と似た風習が多かつた。例へば雄勝などのヲカの餅は、こゝでは岡戎と謂つて鳥の子形であつた。何か大切な謂はれがあるらしいが、知ることが出来なかつたと記してある。松の葉に錢をさして小さな回禮者に與へる風もあつたが、深浦ではそれを錢馬と謂つて居た。家の内の裝飾は精密な見取圖が載せてあるが、殊に此邊の方式は複雑なやうで、京や江戸とは比べものにならず、たゞ遠國の田舎の舊家などに、偶然の一致を求むべきものであつた。例へば圍爐裏の側に米俵を置いて、それに一本の心松を立てる風などは、或は九州邊でも似たる習慣があつたやうに思ふ。皿結びと謂つて藁を皿形に結んだものを、其松に取附けて色々の食物を供へるのは、信州などのヤスも同じであつた。十四日の物忌の一つとして、爐の灰を美しく掻きならして、それから後は手を觸れることを戒めた。其禁を犯すと苗代を鴨が踏むと言つたのは、他地方で足を入れると鷺がつくと言ふのと同じであらう。それから長い串に餅をさして窓をふさぐといふことは、外南部なども同じであつたが、家によつては串には挿さずに、窓から外へ投げるものもあつた。男鹿の本山の柴燈堂の儀式など、考へ合すべき古風である。

八

同じやうな話ばかり續くから、もう此あとは簡略に、目次のみを作つて置かう。次の寛政十年の日記かと思ふ「津輕のつと」には、又小湊から僅か離れた童子といふ山村の正月が記してある。眞澄の宿つた家は農家であつて、他には見なかつた色々の慣が残つて居た。それを此日記にも細密に畫にしてある。九日には又小湊に出かけて、新たに色々の見聞を添へた他に、座頭イタコの物言ひや山家人の酔態、村の女の杓子舞の歌を手記するなど、心ある觀察が多かつた。前に引用した

「奥の手振」と共に、眞澄遺稿の最も價值多き卷である。彼は此後三年ほどは尙津輕に居たが、正月の日記は不幸にして傳はつて居ない。享和元年の冬の初めに、最後に深浦を立つて海づたひに秋田に入り、次の年の正月は多分城下に居た。其翌年の享和三年の春は、阿仁から出て来て北秋田郡の大瀧の温泉に居た。其折の日記は「薄の出湯」であつて、是にも湯の町へ出て来る色々の物賣、伎藝の徒の歌詞が多く載せてある。十四日には十二所の町に往つて鎌倉焼きの式を見物した。此晩から小正月の年越が改めて繰返され、若水年男の作法、白鍋農具の年取りなど、嚴重なることは元旦に劣らなかつた。二十日は目出しの祝と謂つて、其前後に若者娘たちの寄合があつた。替の巫女は十七日に家々を廻つて、神を拜し又世の中の吉凶を占うた。

翌文化元年は阿仁の莊に居た。「浦の笛瀧」といふ一卷はあらくと山村の正月が書いてある。此年は眞澄が始めて男鹿に遊んだ年で、それから引續いて七八年の間は、主として八郎湖の周邊の村々に、多くの知友を見付けて滞在したのである。しかも少しの間でも我家といふものを持たなかつたことは、多くの日記によつて知ることが出来る。二度目の男鹿の勝遊は文化七年の三月から次の年の二月の末まで續いて居て、三卷の詳しい紀行がある。此年の正月記事は「氷魚の村君」といふ日記にあるが、男鹿の東北隅の谷地中といふ海邊の村で、のんびりとした初春の光景を眺めて居る。小正月の田植鳥追ひと色々の物忌、娘や子供たちが如何に新年を楽しんだかに付いても、心の留まる記事が多いのだが、澤山の本文を引かねばならぬから省略する。文化八年の元旦は寒風山の麓、海と湖水に挟まつた宮澤といふ村の、畠山某の家の客であつた。「牡鹿の寒風」の下半分は、この昔風な農家と其周圍の、正月ぶりが書留めてある。自分が頻りに興味を持つミタマの

飯、ヲカの餅の風習から、男鹿で最も有名なナマハギの行事などは、此日記によつて稍詳細なる資料を得るのである。

九

眞澄の雪國の春の日記は、自分の知る限りでは以上十一度の正月以外に、もう傳はつて居らぬやうである。是から後の十七八年は、専ら秋田領の地誌を作る爲に費され、其間に吟詠の事業があつたので、珍らしい日記を中止したものかと思ふ。私は將來の東北文化の研究に向つて、此人の事業が何程の功績を有するかを説く爲に、例を新年習俗の記述に採つたが、勿論之と關係の無い方面にも、他には求められぬ特別の資料は多いのである。而うして問題は何故に菅江眞澄の著作ばかりが、たゞ獨り百年を隔て、今に其價值を認められるかであるが、それには

固より學問と文章との、大きな力も與かつて居る。けれどもそれのみならば他にも彼以上の人は幾らも算へられる。我々の珍重すべきは、主としては彼の境遇であり又氣質である。五十年近くも故郷を振棄て、あの多感の歌心を雪の孤獨に埋没しなければならぬやうな運命は、さう多くの旅人の持つて生れることの出来ぬものであつた。

彼の生涯を一貫して、世に時めくといふ類の朋友は一人も無かつた。學者としては弘前の毛内茂肅、齋藤規房父子の如き、又は久保田の那珂通博の如き、晩年には八澤木の大友直枝なども、次第に彼の詞藻の半面を認むるに至つたやうだが、固より爾汝の間柄ではなかつた。この風雅人の旅の日記を見て、何よりも先づ目に立つのは田夫野人の言葉、彼等と何の心遣ひも無く、自由に立話をした見馴れぬ遠來の客の旅姿であつた。此時代の東北の田舎に於ては、ちやうど明治の終頃

に、やたらに洋服を著た者に目禮をしたと同じく、旅人を粗末にせぬしをらしい氣風があつたことと思ふが、真澄も亦特段に、家々の奉公人とか女や子供とかの、物言ひ舉動に注意をする人であつた。

一〇

「配志和の若葉」や其前後の日記を見ると、奥州の座頭たちの生活が、頗るこの旅人の興味を引いて居たことが知れる。前澤の町には正保といふボサマが居て、折々同席して話をすることもあつた。一通りは歌も詠んで、彼が松前に立つ前などは送別の吟を寄せて居る。物覚えのよい人同士、恐らくは屢々閑談の交換をしたことと思ふ。冬籠りの奥羽の村では、以前は座頭は缺くべからざる刺戟機關であつた。殊に正月も稍末になつて、再び爐の側の沈黙が始まらうとする頃には、

若い者や小兒は堪へ兼ねてボサマの訪問を待つて居た。さうして偶然にも其人々の群の中に、三河國の菅江真澄が居たのである。

盲人は弟子を連れて来て、一曲の後には所謂早物語を語らせた。愛嬌のあるボサマたちは、折々自分でもこしらへた世間話、又は由緒ある昔話をした。

天明八年二月廿一日夜の條に、膽澤郡六日入の鈴木家の圍爐裏のそばに、何一くれ一の二人の盲法師が、一夜の宿を與へられて坐つて居た。三味線を取出して弾かうとすると、童兒が口を出してゾウロリなぢよにすべい、それ止めて昔々かたれといふ。何昔がよからうかといふに爐の向に居た家刀自が、琵琶にスルスでも語らねかと言つたのである。

さらば語り申さう聴きたまへや。昔々どつと昔の大昔、ある家に美しい娘が一人あつたこと、語り始めたのは琵琶法師聳入の喜悲劇であつた。昔の「猿の聳」

の作り替へのやうなものであつた。夜ごほし琵琶を弾くなら娘を遣らうと約束した爲に、夜が明けると手を引いて連れて行かうとする。臺磨碓(シタズルス)を薦に包んで米俵だと謂つて負はせて出す。路傍に休んで座頭が斯う謂つた。目も無い人のオガタになつて、一生うざねを吐かうよりは、此川へ飛込んで二人で死なう。そんならさうと其臼を出して、水の中へごぶんと投込み、娘は片脇に隠れて見て居ると、盲も泣きながら續いて淵へ飛込んだ。身は沈み琵琶と磨臼は、浮いて流れてしがらみに引つかゝる。そこで今でも琵琶に磨臼のたとへあり、「といひてはらり」と語つたと記して居る。

其翌々日は鈴木氏の家を出て、徳岡の村上家へ行かうとした。道案内は一人の少年であつた。雪解の路にあるき疲れて、草原に腰をかけて休んで居ると、兎が飛出して走つて行つた。之を見て童兒が次のやうな話をした。昔兎に行逢うて

田螺(タツブ)が一首の歌をかけた。

朝日さすころかの山の柴かちり耳が長くてをかしかりけり

之を聽いて兎の返歌、

やぶ下のちりく河のごみかぶり尻がよぢれてをかしかりけり

こんな歌を子供が記憶するのは、いふ迄も無くボサマの教育であつた。それよりもをかしいのは奥の草野の彼岸の日の日影に、路に踞まつて兎と田螺の話を、笑つて聽かうとした彼の心持ちである。眞澄此時は三十五歳、長い旅刀を佩び頭巾を被つて居たらしい。天明八年といへば江戸でも京都でも、種々の學問と高尚なる風流が、競ひ進んで居た新文化の世であつた。然るにそれとは没交渉に北上川の片岸を、斯んな寂しい旅人が一人あるいて居たのである。

(昭和三年一月十六日記)

雪中隨筆

新交通

新らしい我々の交通方法は、まだ完全に舊い天地と調和して居なかつた感じがする。日本の如く雪の深い、谷と崖ばかり多い國で、是ほど頻繁に汽車を走らせて居る國は、世界中他にはもう無いやうである。

今年はや殊にひどい雪で、殆ど毎日と言つてもよい位に、どこかで大風雪が汽車を埋めて居る。遠い土地にばかり友だちを持つて居る者の、本當に淋しくてた

まらぬ季節である。

それなのに村の普通の生活は半分しか理解すること能はず、政治とか讀書とかいふ鄰人と共通で無い趣味に、心を傾けやうとする人々が、田舎の隅々に分散して居住する時代になつた。此人たちの互の交通路にも、冬は屢々目に見えぬ雪崩の如きものが、襲うて來るらしいのである。

例へば東京などでは、この二月の初めの土曜日が初雪で、それが野山の松や櫨の蔭にきらめいて、却つて青空の光を明るくした。阿波から土佐への海に沿うた村々では、梅の紅白が早既に散り亂れて居る。久しく寒い故郷を出て斯んな國に留まつて居る人ならば、吹雪の田家の光景を忘れてしまふといふよりも、寧ろ思ひ出すことが出來ぬのである。

平たい言葉で定義づけるならば、友だちとは要するに話をする間柄である。然るに一年の三分の一ほどは、その話の種が切れてしまふのである。消えて無くなるぬ迄も雪の底に埋もれてしまふので、即ち亦一つの交通の故障である。

汽車には限らず、日本では何でもかでも、眞似する積りで無造作に始めた仕事で、後に意外な眞劍の實驗をさせられ、しようこと無しに困り抜いて、それから立派な解決をした場合が多い。交際の問題なども、今に必ず何とかなるであらうが、差當つては當てにして居た空想の飛行機は飛ばず、同情の乗合自動車はいつでも延著するとなれば、如何に詠歎せられる詩の孤獨、高尚なる個人主義にも、やはり炬燵の向ふ側の、空席見たやうなものが出來ずには居ないのである。

私は折々東北地方に居住する友人から、毎日新聞を友として炬燵で暮らして居るといふ手紙を貰ふ。新聞が果してどの程度にまで、炬燵の向ひの珍客の代りをするものであらうか。それを實驗すべく僅かな紙面を借りて、逢ふことの出來ぬ

雪の中の人と、及び越しにこの共同の問題を考へて見ようと思ふ。

コタツ時代

東京の私の家の炬燵には、いつでも所謂洋服を著た少年と少女とがあたつて居る。非常に寒くてたまらぬからでは無く、他には足を投げ出してごろんとして居る場處が、冬になると無くなつてしまふからである。それ故に大抵馬鹿々々しくぬるい。自分などは一寸側へ寄ると、きまつて何か用事を思ひ出して立つてしまふ。つまり格別の必要が實は無いのである。

斯ういふ炬燵を見るたびに、自分は時代といふものを觀て居るやうな感じがする。温度は炬燵の第一の要件であるにも拘はらず、それを此程度に変更して迄も全國の大區域に亙つて、此趣味を流行させた時代が會てはあつたのである。それ

が今日は如何にも意味の無いものとなつて、單に強い反對が起らないといふ原因だけで、僅かに残つて居る地方も此通り弘いのである。是と同時に舊日本の約半分には於ては、その炬燵の火は尙きつく、必要は今もつて少しも減退して居ないのであるが、しかも二三分間も考へて見れば直ぐわかるやうに、炬燵も亦確かに時代の産物であつて、決して阪上田村麿が惡路王を征討した、所謂大同二年頃から既に東北の雪國に、在つたわけでも無いのである。

炬燵といふ六つかしい二個の漢字は、多分五山の禪僧の一人の、發明であらうといふ説がある。さうかも知れぬが文字よりも其言葉の意味が、炬燵の趣意以上に不可解であつて、事によると此制度の滅亡以前には、其歴史を明かにすることが困難であるかも知れぬ。併し名稱の如きはどうあつても宜しい。其よりも更に大切なるは、何故に斯んな奇妙なものが、いつ頃誰によつて創成せられたかであ

るが、是は單なる常識から判定をして、掛けてある四角な蒲團と稱するものよりも、より古く存在し得なかつたことは明白である。

蒲團が我々日本人の夜具の一種になつたのも、やはり中世以後の事でなければならぬ。其證據には此語も亦支那の宋代あたりの音で、別に之に對する固有の日本語は無かつたのである。

フスマ(衾)と謂ふのは大形の衣服のことであつた。ヨブスマといふのは、全身を蔽ひ包む程の大きな藤布製などの夜具のことで、妖怪のヨブスマも其から出た名かと思ふ。近い頃まで山村で使用して居たのは、何れも袖が有り又襟があつた。斯んな形の衾の下には、炬燵は到底發達し得なかつた。つまり炬燵時代は歴史の教科書にこそ書いて無いが、さう古くはない或昔の新文化であつた。

風 と 光 と

兎に角に自分は炬燵その物よりも、コタツ時代とも名づくべき前期生活に興味をもつ。殊にこの奇抜にして而も優長なる保温法を、現在の完成にまで持ち運んで來た所の、文明の過程には考察すべきものがあると思ふ。

けだし火の最も原始的なる魅惑力は、炎であり光であつた。子供などは何の入用も無い場合にも、物を燃やして突如として咲く花の、あでやかさを賞玩しようとした。暗黒の不安を追ひ拂ふ爲には、跳ねてぱち／＼と音を立てるやうな、豆がら馬酔木の類をまじへて焚く必要さへ認められた。然るに今炬燵の溫雅なる情趣を味はんとするならば、もう此等一切の古風なる快樂と、袖を別つてしまはねばならなかつたのである。

必ずしも巖窟の穴の奥に隠れた大昔には限らず、家を建て簾を垂れて住み始めてよりずつと後まで、窓は出来るだけ高く小さく、戸を閉ぢ壁を塞いで雨であれ風であれ、あらゆる外から来る者を總括して、畏れ且つ防衛して居た世の中に於ては、爐の火は誠にたゞ一つの家の中の光明であつた。

月は洩れ雨は漏るなといふ古歌にもある通り、耀く青空の光ばかりを、差別して内に迎へ入れる方法は、以前には無かつたのである。それが今日の様にどの室も明るく、最早爐の火に炎と光明とを仰ぐことを、必要とせぬ迄になつたのは、單なる人間の智慮分別と言はんよりも、寧ろ具體的に紙の力、あかり障子の功勞と謂つた方が當つて居る。

其後紙は追々に硝子に取つて代られ、終には日中の電氣燈とまで進んで来て、人は如何なる地下室の底でも、働き得るやうになつたのであるが、其は必ずし

も結構なことで無いかも知れぬ。たゞ少なくとも數十年來の火の光を斷念し、曾ては荒神様とまで尊信畏服して居たものを、今日の如く自由自在に制御するやうになつたのも、要するに皆コタツ時代の新たなる事業であり、又自信ある勇氣の獲物であつて、炬燵は此意味に於ては、我國民文明の一つの凱旋門であつた。

藁 蒲 團

旅人の文學などは通例誇張が多く、且つ同情はあつても省察が常に不足であつた。殊に一丈二丈の雪の底の生活に至つては、もし外部から誰かど心付くのを待つて居るとしたら、斯うして炬燵の起原の如くに、自分でも忘れてしまふ頃まで棄て、置かれるであらう。土地に住む者が靜かに其閑暇を以て、獨立して考へて見るより他は無いのである。

或は考へて見た人も多かつたのかも知れぬが、少なくとも其は山一つ彼方までも傳はらなかつた。それ故に今日の如く、書物で學問をする風が盛んになつて來ると、却つて谷々の冬は寂しくなるのである。炬燵の序を以て今少しく此點を話して見たい。

鈴木牧之の北越雪譜の中には、信州秋山郷の山家の夜の光景が畫に描かれて居る。藁で造つた一人用二人用の吠(カマス)の中に、夫婦親子が頸から下を差入れて、圍爐裏の四側にごろ／＼と寢て居る。珍らしくも又をかしい風俗には相違ないが、世間を知らぬので此邊ばかり、永らく其様な生活をして居たといふのみで曾て一度は我々一同の祖先も、美女も勇士も斯うして藁の中に、寢て居た時代があつたのである。

北へ北へと此國を開いて來た民族が、今以て稻を作らずには片時も安心して居られぬといふわけは、稻が故郷の亞熱帶の植物であつて、神の黍(シトギ)も祭の日の米の飯も、是が最第一の資料だといふばかりでは無かつた。冬の長夜を安々と睡り去る爲には、尙其上に年々の新藁と、新粃殻とが澤山に入用であつた時代が、餘り久しかつた故に今も其癖が抜けないのである。

それが木綿の種子を輸入して栽培し、綿や古著の賣買が繁くなると、百年もたたぬ内に藁のトコは疊の名と變じ、をかした昔の笑話のみが、いつ迄も世の中に残るのである。或貧家の少年が寢藁々々とよく謂ふので、見得坊の父が之を戒め人の聞く前では必ず蒲團と謂へと教へて置くと、チャンよ、こなたの脊中に蒲團が一筋くつついて居るは、と云つたといふ類の話である。或は寢所の帳臺を耻隠しなごゝ名づけて、其敷居を高くしたのは中の寢藁を見せぬ爲だつたと、今でも信じて居る地方もある。其様に萬人共通の昔をさへ耻づる傾きがある故に、不必



要に田舎の古風が、段々と輕んせられることになつたのである。

センバ式文化

「一筋の脊中の蒲團」と、系統を同じくする笑話の一つに、父よ此村では十能で屋根を葺いとるのと謂つたのもあつた。今でこそ山の奥までも萱野が開墾せられて、瓦で葺いた家が追々に多くなつたが、以前は宮寺さへも皆草屋であつた。さうして偶々此話の少年の家では、瓦が一枚だけあつて、それを火取りの用に供して居たのである。

それ程に十能といふものが、元は重要でない器具であつた。つまりは炬燵火鉢の類が少なくて、火を取るべき場合が稀であつたのである。十能は奥羽と九州ではヒカキ又はヒトリと謂ひ、他の中央部の大區域ではセンバと呼んで居る。セン

バも十能もやはりコタツと同様に、その語の根原が自分にはまだ分らぬが、兎に角に古い道具でなかつた證據には、是亦今一つ以前の固有日本語の、之に該當するものが無いのである。

火カキと謂ふに至つた理由だけは略明白である。即ち今ある長火鉢の灰ならしと同じで、夜分圍爐裏の火をいける爲に灰を掻き上げる器を、時折は火種を運ぶのに兼用して居た迄であつたことは、あの格好からでも容易に想像することが出来る。それが臺十能などといふ特別の形式を供へるに至つたのは、勿論木炭の製法が普及してから後の事で、その木炭は亦つひ近年まで、多くの田舎の家庭に於ては、わざ／＼製造せねばならぬ必要を認めなかつたものである。

センバが多くの雪國に於て珍重せられたのは、考へて見れば深い仔細があつた是は大事な賓客の爲に、特に奥座敷の雨戸を明け放すのと同じ趣旨で、爐の火を

取分けて別に一席を設けることは、日常普通の訪問者に對しては、決してせぬ習ひであつたからである。それには此器物の金屬としての新らしい趣味も加はつて奥羽の各地の如く夏の土用の炎天でも、客が來ると先づ第一著に、センバを持出すのを以て款待の表示とするやうになつたものかと思ふ。

古風の客あしらひには此類の方式化が多かつた。今日の實際では、客を家族の一員の如く待遇することが、非常な好意の様に悦ばれることになつたが、家には家長の権力が強大である以上、以前はそんなことをするのを非禮と考へたに不思議は無い。それ故に主人は我家と設備との一部分を區劃して、それを稀なる旅人の臨時の領分に提供したのである。

斯ういふ方面にも日本人の人情は變遷した。さうして形體だけの今尙残つて居て、我々をまごつかしめる例は多い。

火 の 分 裂

如何なる種類の新しい文化でも、必ず一度は經過せねばならなかつた如く、炬燵の普及にもやはり初期の制限はあつたやうである。十能の構造をざれほど改良して見たところで、炭燒の技術が之に伴うて進歩せぬ限は、炬燵の恩澤は到底遠く及ぶことが六つかしかつた。

ヲキと消炭との能力だけならば高の知れたものである。精々茶の間の附近に今一つの出張所を作る位のもので、出居奥座敷離れの四疊半といふ處まで、度々焚き落しの如きものを運んで居るわけには行かぬ。畢竟するに大小幾つかの炬燵の割據獨立は、炭取りの新發明が之を可能ならしめたと言ふべく、時雨の炬燵といふ類の近松式戀愛なども、言はず木炭文明以後の新産物に過ぎなかつた。

それ故に炬燵はもと、主として夜の設備であつたといふことが出来る。俳諧續猿蓑の連句に曰く、

別を人の言ひ出せば泣く

里圃

こたつの火いけて勝手を静まらせ

馬寛

一石踏みしからうすの米

沾圃

更けて皆の者がさアもう寢ようとなつて、鍵を引上げ板敷に釜をおろし、いぶる燃えさしは土間へ出してとつくりと消してから、残りのヲキを灰に埋め、其上へ大きな蒲團を覆うて、もぐり込んで一同が睡つたのである。夜中に少し寒くなつたとしても、起きて蒲團をまくつて新たに焚き付けるか、辛抱するかより他には別に方法とても無かつたのである。

和歌に埋火のもとなど、詠すればこそ甚だ風流であるが、先づ最初の炬燵は

是くらの不便なものであつた。丹念な家では夏中のヲキを消して貯へて置いて、夜永の寒さに出して使つたかも知れぬが、大抵は起きて居る限り大火を焚き、残りの温氣だけを炬燵として利用したのである。

信州などでは此の半ば概念のやうな暖か味ほどぼりを、如何なる意味でか知らぬがクヨークリと名づけて居る。クヨークリは燠の如く具體的ならず、爐から外へ出せば忽ちにして唯の灰と化し去る。乃ち第二の炬燵、日中の炬燵の、以前は自在に企て得られざりし所以である。

それが墜炭の世となり、更に所謂炭團の世となつて、安火だの猫だの番所だのと、便利至極なる置炬燵までが工夫せられ、例へば田舎の御役所のテーブルの下にまで、利用せられることになつたといふのは、炬燵その物の立場から觀察すれば、是も一つの解放には相違なかつた。

炭と家族制度

自慢してよいか悪いかは別の論として、炭焼の事業だけは日本の進歩が世界一らしい。國の生産總量のみならず、此が配給貯藏方法の完備、利用應用の巧妙さから、僅かな歲月の間に改良の成績を擧げ得た點まで、是だけ鮮かに他國を抜いた生産は、恐らく指を折つて算へる程もあるまい。

伊太利といふ國の日本と似て居る一つの點は、南の半分ではストーブといふものを知らず、炭火の小さな手あぶりを、客にも出せばめい／＼にも控へて居ることであるが、氣の毒ながら彼はまだコタツを知らない。尤も暖かいから或はもう永久に真似をせぬかも知らぬ。其他の歐羅巴の寒い國々でも、木炭といふ言葉はあり、以前は山に入つてわざ／＼焼いて居たことも確かだが、其目的の限られて

居たことは、日本の中世と同じであつた。全體に西洋人の採温法は、つい近頃までは我々よりもおかれて居た。炭を使ふのは鍛冶屋か鑄物師か、さうで無ければ化學の研究室ぐらゐのものであつた。それが石炭を盛んに焚き、次いで又電氣を引いて使ふやうになつたから、もう今後は或は製法を忘れてしまふかも知れない又炭に焼くべき雜木などの、さう多くないことも事實である。

ところが我々の方ではどうかと謂ふと、炭の趣味は今や流行の絶頂に達したかどさへ思はれる。都市に於ては瓦斯石炭と對抗し、農村に在つては圍爐裏の火から分立して、炬燵火鉢を一種の城砦として、防ぎ守らんとする特殊の利害、特殊の文明の如きものが新たに現れて居るのである。それが新聞と雑誌と澤山の雜書とを味方に引入れて、炬燵に籠城する所謂有識階級を形づくつて居ることは、我が冬になる毎に最も痛切に實驗する所である。

尤も此傾向を悉く木炭の責任に歸するは明かに不當な速断である。炭自身には未だ曾て、砂糖の甘味や酒の酔の如き、流行を促す力は具へて居なかつたので、實際は恰も國風の變化、殊に家を同じくして住む人々の相互の關係が、一つの圍爐裏を取巻くほど緊密で無く、さりこて飛出して竈を別にする程も疎遠ならず、つまりは木炭を利用して各自の室の炬燵に、割據して居たいといふ位の時代に到達して居た爲に、此物が目に立つて用ゐられることになつたものかと思ふ。

火の管理者

人間が家を持ち家族といふものを引纏め得たのは、火の發見の結果と言つてよろしい。光と温度と食物との一大中心として、圍爐裏といふものが若し無かつたならば、到底今見るやうな家庭及び社會は出來上らなかつたらう。民の竈と謂ひ

若くは戸數を何十何煙と謂つて算へたのも、實は一家の内に火を焚く場處が、ただ一つしか無かつたことを意味するのである。

その火の管理者を日本ではアルジと名づけ、後には又御亭とも旦那殿とも稱した。さうして其管理權の所在を、具體化したものが爐の横座であつた。横座とは謂つてもそれが正面の席であつて、事實は其左右の敷物が何れも縦に連なつて居るに對して、家長の座だけは横疊に敷いてある故に、さういふ名前が古くから生じて居たのである。

通例は向つて爐の右手、即ち横座から左になる一側を、嚙座若くは茶飲み座、腰元又は勝手など、と呼んで居る。その最も横座に接近した席は、當然に主婦に專屬した。ヘラ即ち飯匙は其權力の象徴であり、食物の分配は唯ヘラ取り即ちオカタ殿のみの掌る所であり、誤つて其席を侵したアネ子などは、それだけでも離

縁せられるに十分な理由があつた。

此序を以て尙言ふならば、嚙座と相對する他の一側が客座である。此にも席次があつて最も款待せらるべき者が、一番横座の右近くに坐つた。同じく續猿蓑の俳諧の附け合ひに、

聲が來てにつともせず物語り

なごゝあるのは、つまり此邊の光景に他ならぬのである。それから残りの今一側の爐端が、下座下郎座又は木尻である。嫁は木尻筋から貫へといふ諺などもあつて、一段と身分の低いものゝ坐席である。此を津輕などでは轉訛してキンスリ座とも謂ふさうだが、本來は薪の尻を其方へ向けて置く故の名であつた。煙いのを我慢すべき、居心地のよくない座であつた。

さて是ほど迄に秩序を正して、家には一つしか火の中心を作らぬやうに努めた

のであるが、人の心の變化は是非無いもので、終に室毎に炬燵を置かねばならぬ時代が來た。最初は取扱に面倒な年寄などを賺して、安火一個に封じ込めたりしたものが、後には息子が新聞や本を抱へて、自ら獨立を宣するやうになつた。それを後援したのは紙と硝子の障子、次にはランプ又電氣燈などであつた。が勿論彼等は之を教唆したので無く、木炭と同様に頼まれてたゞ遣つて來たゞけである。

炭 燒 來 る

日本に若し雨雪が少なくて、土で塗つた家が發達し、若くは石を重ねて二階三階が出来る位に、地震の心配の少ない國であつたら、町でも平氣で大火を燃やして、いつ迄も炭の便利は認めるに至らなかつたかも知れぬ。ところが城下に木の家を小さく建て、住むには、焚き火は何分にも不安全でいけないとなつて、寒く

とも是にて我慢をすべしと、炭櫃(スビツ)火桶の類を工夫して使用せしめた。町の女などは氣働きのある者で、それに籠を伏せて衣類を温めたり、又は僅かな香料を焚きこめたりして居たのが、後に在所に於て眞似をし始めた、炬燵の根元で無いかと自分は思つて居る。炬燵といふ厄介な二個の制限漢字と共に、この便法も亦禪坊主が發明したといふ説は、徹底を本旨として居た彼等の名譽の爲に、實は自分たちの信せざらんと欲する所である。

炭は足利時代の末の頃までは、京都の武家ですら尙御馳走の一部分であつた。火箸で炭を挟むことを知らなかつたといふ話も傳はつて居る。若い時に或大家に奉公をして居た女性が、私は炭は手で取るものとはかり思つて居たといふのを聽いて、手が汚れて困つたらうにと不審すると、それではもう此節の炭は、油を引いて一つ／＼紙で拭うては置かぬのかと、却つて喫驚したさうだなどと謂つて居

るが、是も織田信長の料理人の逸話と同じく、成上がり武家の俗惡を冷評した所の、所謂一つ話の一つであらうと思ふ。

要するに炭はもと趣味のもので、自然天然の寒氣が促して之を製産せしめたものではなかつた。本來深山の奥を出で、先づ一旦は町城下の生活に参加し、それから再び逆戻りして徐々に村里に入込んだことは、金銀水晶など、其徑路を一にして居る。明治昭代の都府文明の大飛躍、此に歸伏し渴仰した人心、それを繋ぎ合せた船車の新交通が無かつたら、恐らくは今日の製炭傳習も無く講話も無く、遙かの國から炭焼さんも入つて來ず、村では依然圍爐裏の焚き落しを限度として晝日中から炬燵で轉寢をするやうな、淋しい人生を展開することが出来なかつたであらう。昔も今も偶然の外部の變化に刺戟せられ、出來合ひの境遇に囚はれ又は引摺られて行くことは、人間の誠に氣の毒な一つの癖であつた。

夢は新たななり

奥州では津輕栗原信夫、羽前の最上、それから信州木曾の園原などに於ては、炭焼藤太は必ず金賣吉次の父であつた。山に入つて炭を焼くことが因縁を爲して他日萬福長者の第一世となつたといふ土地の口碑は、この廣い區域に亙つて共通である。今日の山小屋の寂しく薄暗い炭焼生活を知つて居る人々に、一人として斯んな莫大なる將來の幸運を想像し得る者があらうか。しかも先年自分が略證明し得た所では、南は沖繩の島まで分布する同一の昔話は、何れも炭焼が自ら之を發明し且つ携へあるいて、處々の山國の雪の中の住民にも語つたらしいのである。即ち彼等是一種の職業的空想家であつた。

それといふのが本來木炭の用途が、原則として家庭日常のものでなかつたからである。狸か何かの皮を縫ひ合せて、大なる踏鞴(タタラ)といふものを作り、それを足で踏んで盛んに炭の火を起し、金屬を鎔解して色々の器物を造る人ばかりが、山に竈を築いて多量の炭を製するの必要を持つて居た故である。さうしてこの所謂作金者は、作業の性質から五人七人の小さな群を爲して、遠近の山野を廻つて原料を求め、又泉ある處に假屋を建て、或期間その見馴れぬ工藝を人に見せて居た。カネは多分カナシといふ語と語原が一つで、英語の *cash* など、同じ意味を有つて居たのかと思ふ。技術上の門外漢たちが自を圓くして、最初の金屬の出現を見物した光景は、此一語からでも之を想像することが出来る。而うして炭は正しく其記念物として、金屋の去つた跡に残さるべきものであつた。

即ち物は眞黒で無風流であらうとも、非常に高尚なる聯想を伴なうたものであつた。手短かに言へば新文化であつた。筆者などの少年の頃に、家の前の村路が

國道になつて、毎日々々牛車に石炭を積み、但馬の生野の官營銀山に運んで行く時代があつた。私の在所では石炭のことをゴヘダと呼んで居た。其ゴヘダの黒く光つた小破片を、牛車の過ぎた跡から拾つて來て、試みに火にくべて見た者も多かつた。さうしてあの香氣を非常に意味あるもの、何か歐米の文物に交渉あるもの、如くに、感じた人も自分のみでは無かつたのである。旅の鑄物師等が來て焼いた炭には、格別異なる臭ひも無かつたらうけれども、其代りには彼等の歌、彼等の物語は永く耳に残つた。村の住民の考へても見なかつた新天地が、之に由つて田舎へは持込まれたのである。

折り焚く柴

火を焚けば話がはづむといふ原因結果は、よほど久しい大昔からの、不思議な

る法則であつたらしい。前年和蘭のローレンス博士の一行が、二度目のニウギニヤ雪山の探検を企てた時には、色々考へた末にボルネオ内地の土人を人夫に連れて行つた。勇敢で従順で正直なことは申分が無かつたが、たゞ一つの缺點は夜營地で焚き火をさせると、火の有る間は話をして居てどうしても睡らないから、日中に居眠りをして困ることであつた。赤道直下の島に生れた彼等には、通例は火の必要は無い筈であるが、一たび高山に登つて楢火の夜の光に接すると、忽ちにして悠遠なる祖先の感覺が目ざめて、特殊の興奮に誘はれずには居なかつたのである。

此點は酒などの効果もよく似たものであつた。酒に若し人をして歌はしめ、牛蒡を掘らしめる力が具はつて居るものならば、飲む者が悉くさう無ければならぬ道理であるが、世の中が開けるにつれて其様な人は無くなる。つまり面白く笑ひ

罵り、又は酔泣きすべき機会が、あべこべに酒盛りの日を待つて居て現れるだけである。日本に於ても昔話は冬のものであり、且つ夜分にするものときまつて居たのは、本來は必ず圍爐裏に火を燃す時の儀式であつた爲かと思ふ。即ち横座の主は家の火の管理者であると同時に、更に先天的に夜話の議長であり、且つこの傳統教育の學校長でもあつたかと思ふのである。

故に家より外で焚いた火を炭にして、持込んで來るといふことは革命であつた。三寶荒神の信仰に統一の力が無くなつたことを意味するのみならず、炭に伴うて遠國の物語が、段々に入込んで村里の歴史を紛亂せしめたことを、推測することにも困難では無い。西洋の國々では炭焼は無口な山人として床しがられて居るが、我々の中には反對の例が多い。例へば佐々木喜善君の江刺郡昔話などは、其大部分がかの郡から來て居た炭焼から聽いたものだといふ。東北の山奥には思ひがけ

ぬ地方から、入つて炭竈を築いて火を焚いて居る者が今でも多い。それから又一方には文藝や思想の上に於ても、ちやうど縣町村の計畫を以て、製炭技術の講習會を開催すると同じ様に、縁もゆかりも無かつたことを教へられる場合が多い。家の火の祭壇は次第に其信徒と供物とを、失はざるを得ないわけである。

舊文明の名残

所謂小正月わか年の晩には、豆や胡桃を火に焼いてそれを圍爐裏の灰の上に竝べ、十二ヶ月の晴雨吉凶を占ふことが、いつの世からとも無い我々の慣習であつた。然るに農作の不安は今も昔の儘であつて、獨り火の文明ばかりが際限も無く進展し、又成長しようとするのである。その舊式生活の別離に臨んで、責めて暫らくの炬燵趣味に、低徊せんとする人の多いのは自然である。

併し結局は移つて次の火に進むべき時節の、既に近づいて居ることも亦確かである。然らば百年の未來の回顧の日の爲に、我々は何を記念として留めて置けばよいのであらうか。長い大きな旅をして來た國民ではあるが、我々平民の足跡は思ひの外に幽かである。何も爲すこと無く過ぎて來たわけでは決して無からうがあまり前途を見詰めて居た爲か、歴史にはまだ注意の及ばなかつた隅々が多い。このコタツ時代が今のまゝで終了するとしたら、又澤山の過去が永久に忘れられるであらう。

今のうちに些しづゝでも考へて置いたらどんなものであらうか。或は是も下らぬ穿鑿といふものかも知らぬが、我々のこの毎日の生活には、小さな不可思議が充滿して居る。例へば炬燵の中で手を叩くことを、老人などの非常にいやがる土地が今でもあつて、それを何故かと尋ねて見ても、もう説明し得る者は一人も無

いのである。炬燵は火の神の信仰に對して、明白に一つの叛逆であつた。正月松の内に圍爐裏に足を入れると、苗代に鷲が附くなど、謂つて叱られて居たのに、炬燵では何の遠慮も無く、によき／＼と突き出してあたつて居る。それにも拘らず、尙知らぬ間に以前からの約束を踏襲して、火の清濁の差別待遇を承認し、此火は食物の煮焼きなどに供用せぬことにきめて居た。手を叩くといふのも恐らくは荒神様の禮拜を意味し、火の淨からぬ炬燵の中では、其行爲を嚴戒して居たものかと思ふ。

しかも今日では火棚火鍵は元の黒光りの儘であつても、最早手を叩いてヒボトを拜む者は無くなつた。それだのに斯んな形式が迷信となつて残つて居る。即ち古い信仰は、却つて革命家の手に由つて、保存せられて居たことになるのである。それを考へ又語り得る能力のある人が、炬燵に凭つて靜かに雪中の日を送つて居

る間に、尙一度後世の學徒に代つて、この消え残る上古の光と炎とを、辿つて見ることも意義があると思ふ。

(昭和二年二月、東京朝日新聞)

北の野の緑

一

奥羽の天然を愛する者が、少し本意ないことに思つてゐるのは、夏の日の草木の緑色が、あまりに強烈で柔かみの無いことである。それは人口のまだ稀薄なためで、今にも大いに開けて赤土山の公園などが出来たら、別に中央部とかはることは無くなるだらうと言ふ人もあるが、必ずしもさうでなささうに思はれるのみならず、さういふ破壊作用を待つて居るわけにも行かぬ。

東北の風光の美しいのは誰に聞いても紅葉の秋だといふ。それから後の冬木立の山野もよし、春は四峰の雪白水が充ち溢れて、蛙郭公の啼く頃の若緑も、永く待つたゞけに、人の心をとろかす様にあるらしい。それが再び次の秋に移つて行くまでの數週間は、土地の人々には休憩であり晝寢であつて、必ずしも之を顧みるに足らぬのか知らぬが、生憎その時ばかりが旅行者の季節である。それも火酒を頓服するやうな都人式の急行納涼ならば、變化の少しでも激しいのを喜んでよからうけれども、或はたゞすみ或は腰を掛けて、靜かに見て居りたい者には、少しくあの色彩が單調であり、また無情であるやうに感じないわけに行かぬ。

あれは恐らくは日の光の効果か、又は氣中の水分の加減でもあらう。今一段と高い緯度に進むと、次第に此色が白々と、幾分軽く頼りなくなるやうに思ふことは、北歐羅巴をあるいた人の、誰でも容易に經驗する所である。太平洋岸では仙臺松島を過ぎ、一望平遠なる沼澤地域に入らうとする頃から、緑の色のきつさが追々に眼に迫つて来る。時刻のせいにか空模様かとも考へて見たが、何度通つても同じ感じで、行けば行くほど淋しさが加はり、終には一人では東北には来る者でないと思つたこともある。

二

或は古人も心付いて居たのではないかと思ふ。若しさうで無ければ無意識に、この過多の涼味を加減することを企て、居た形跡がある。秋風ぞ吹くの白河を越えんと、街道の並木の赤松が殊に多くなる。その松の幹の色が何ともいへない佳い色に赭くて、常に心を引かれることは、恐らくは汽車で通つた人にも同じであつたらう。それから土地によると、兩側に長葉の楊樹(カハヤナギ)を栽ゑてあり

路傍の人家も努めて其蔭に寄つて住まうとしてゐる。この木の幹は又思ひ切つて黒い。さうして葉も少しばかり、他の木よりは緑が淡いやうである。その葉の間からちら／＼と見える黒い幹は、單純ながらも風情のある配合である。並木は主として大雪の日の旅人に、路を導く爲のものど認められて居るが、そればかりの趣旨では多分無かつたらう。法令を以て並木に果樹を栽ゑしめた時代もある。夏の日の陰は寒國に於ても入用である。但し楊は早く成長し早く老い、固より松の長壽なるに如かなかつた。それ故に今は奥州に於ても、若干の伐り残しを見ることになつたのである。

それだけならよいが赤松もどし／＼伐られる。自分等が物を覺えてから、奥羽の並木の拂下げられた例は多い。山林は風致林といふ名目を設けて保存しながら土木の官吏は豫算を捻出する場合に、いつでも心無く並木の老松の伐採を計畫す

る。さうして其跡へは滅多に栽ゑたためしが無く、況んや何を栽ゑようかなどは丸つきり考へぬことにして居るやうである。

三

尤も樹を栽ゑることは近代の一つの流行だが、それは只個人の家のみならず、さも無ければ學校とか小公園とかの、一旦土を削つて地肌を見せた處へ、そんな土地にも成長するものを栽ゑるばかりで、廣い平原の大きい風景の調和などは、何人の任務でも無いから誰も考へない。十和田に七月末に行つて見ると、五月下旬の半ば解けた雪の間から、たつた一本の櫻が咲いて居た、前回の時よりもまだ淋しい。いやなものだがせめて文化式赤瓦の家なりとも、そこらの湖畔にあればよいと思つた。花巻の温泉は萬事電氣づくめの新式遊覽地だが、山を眺めて居ると

いつも夕方のやうな氣持がする。何故に此山に百合の紅白、もしくは萱草のやうな赤い花でも、取合せて見ようと思はぬのかと言つて見た。つまりは天然は無條件に、いつでも優しく美しいものと、妄信し得られた國の幸福である。

實際また人間の方で、さう澤山の變化は加へられないのかも知れぬ。しかし東北の人の心持は、不思議に古くからの路傍の松柳に現れてゐたのみならず、それが尙家々の庭前の花木、更に一步を進めては娘たちの身だしなみの上まで、偶然ならず認められるのは、恐らく我々のまだ知らぬ眞實であらう。

鹿角郡などの最も草深い田舎をあるくと、華やかな笑ひ聲よりも先に目に入るのは、働く女たちの躑躅色牡丹色などのかぶり物である。全身を現はして路をあるいて來るのを見ると、襷でも腰巻でも僅かな袖口でも、北地へ行くほど彩色が鳥に近くなる。斯うして若い人ばかりの注意を引付けようとする外に、自分が先

づ緑の壓迫に堪へなかつたから、何とかして彩つて見る氣になるのかも知れぬ。それが無意識ながら弘い天然と調和して、夏の淋しさを柔らげ、又女性を缺くべからざるものにしたかと思ふ。

數年前に私があるいたころは、外南部などには白い布の流行が認められた。夏の花の多くは小さいのに比べると、これは大きく動くから印象は深かつたが、それでも山吹や鮮かな藤色のやうな、快活さはやゝ減少するやうに感じた。即ちあまりに一人々々の空想が自由になることも、土地の爲には幸福で無いやうに考へられるのである。

四

自然は勿論人が愛玩するために設けられたもので無い。南北極地の雪の野が、

永久に眞白で一つの斑點も無い如く、ニウギニヤの島などの緑樹海は、今なほ完全到我々に閉されてゐる。しかし人間は求めざれば止まぬ。ウオレエス博士の馬來多島海記の中には、幾度と無く花が無い、鳥や蝶があまりに少ないと歎息してゐる。奥羽を愛する旅人が、かの單調の緑の涼しさだけに、満足し得ないのも理由があると思ふ。

(昭和二年六月、週間朝日)

草木と海と

名所崇拜

旅行者には好い旅行といふ記念は多いが、好い景色といふ語は却つて空に聞える。松島の海などは曾て小舟で渡つた日、沖から雨の横吹があつて、赤く濁つて騒いで居た爲に、今に自分はなつかしいと云ふ感じを抱くことが出来ぬ。折角来たのだからと宿に居て日和を待つだけの、熱心の無かつたのは風流に反するかも知れぬが、暮春初夏の静かなる日の光に手傳つてもらつてならば、松島ならずとも多くの島山は皆美しいわけである。兎に角に名所は我々に取つて、實は無用の

拘束であつた。

それよりも口癖のやうに海の風景を説く日本人が、支那の新古の畫卷などから趣味の教育を受けて居るのは存外なものである。窮天平蕪の野に家居する人民の奇峰怪石を愛するのは自然の情でもあらうが、我々は谷の民だ。さうして又海から入つて來た移住者の末であり、盆地の窮屈に倦んで居る者である。濱に臨み岬の端に立つて迄、ひねくれた松の樹を歌に詠む義理は無い。松は海に親しい木ではあるが、殊に風の力に本性を左右せられ易い。野中の神の社などで出逢ふやうな自由奔放なる大木は、海邊に來ると見られない。たまには珍しいといふのみで氣の毒ながら木の畸形だ。濱の遊びの面白かつた名残に、他に記憶し得る纏まつた印象も無い爲に、人が單に松だの岩だのに由つて、聯想の目標をきめるだけである。耶蘇教で言ふならば十字架見たやうなものだ。

海山は廣くのんびりとして居るけれども、我々の庭はせゝこましい。然るに、斯ういふ松や岩を賞美する者がよく用ゐる褒言葉は、持つて行けるものならうちの築山にして眺めて居たいなどといふ。不心得な話である。いゝ畫を見ると眞に迫つて居るといふのはよいが、好い風景に對して畫の如しだの、畫に描くとも及ばすなどといふのは、よほど平凡なる天地に生を受けた、大陸人の口眞似に外ならぬ。そんな人たちと風景の論をして見たところで、話の會はぬことは始から知れ切つて居る。

紀行文學の弊

風景は畫卷や額のやうに、いつでも同じ顔はして居らぬ。先づ第一に時代が之を變化させる。我々の一生涯でも行合せた季節、雨雪の彩色は勿論として、空に

動く雲の量、風の方角などは悉く其姿を左右する。事によると之に面した旅人の心持、例へば昨晚の眠と夢、胃腸の加減までが美しさに影響するかも知れぬ。つまりは個々の瞬間の遭遇であつて、それだから又生活と交渉することが濃かなのである。多分あの邊を旅行して見たら、好い機會が横はつて居るかも知れぬと、推測し勸説し得る場處は幾らでもあらうが、とてもそれ以上の約束を天然から徴することは不可能である。或は見物の方が甚だしく無我で、聞きしにまさるなどと感歎することがあつても、それは唯西行宗祇山陽拙堂等の、従順なる信者といふに過ぎぬ。

いつ頃から用ひ始めたか、日本には名勝といふ語があつて、近年法律を以て之を指定し保存することに爲つて居る。名所といふ俗語の音の轉訛では無いかと思ふ。兎に角に名勝は風雅道の靈場、文人傳の古蹟ともいふべきものだが、風景の

方から云へば最も押の強い押賣りである。今更旅人の拘束せらるまじき舊法則である。所謂紀行文學の如き、圖書館では地誌の部に置かれながら、如何にも狭い主觀の、獨斷的個人的の記述であることは、既に心付いた者が多いのであるが、名ある古人を思慕すること、無名の山川を愛するの情に優つて居る國柄では、風景の遇不遇といふことが殊に大きな意味を持つ。水陸大小の交通路は固より、繪葉書も案内記も心を合せて、今古若干の文人の足跡ばかりを追隨させ、わけも無い風景の流行を作つてしまつた。風景自身に取つては寧ろ顧みられぬのは本意かも知れぬが、靜かに田舎に住んで天然の美しさを學ぼうとする者の爲には、無用な誘惑であり又有害な錯亂である。

天然の觀賞だけなりとも、責めて我々は態度の自由を保ち得たいと思ふ。都會人の具へた感覺の力の中で、やゝ精微を誇り得るのは舌と鼻とだが、それも煙草

に荒されて今は稍衰へんとして居る。目と耳とに至つては最初から、概して田舎には及ばなかつた。さうで無くとも狭苦しい経験の中から、彼等が発見したやうな風景の標準に、全國民が引廻されてたまつたもので無い。中央集權の腹立たしい壓迫の中でも、一番に反抗して見たいのは文藝の專制である。それも日本人を代表し得る優秀な創造力、乃至は親切周到なる觀察から出たものならまだしも、何かといふと外國の受賞をして、所謂つくねいも式山水を有難がるやうな連中に、風景を指定して貰はうとする客引根性は止めさせねばならぬ。それが最も眞率に此國土を愛するの道である。

松が多過ぎる

日本固有の平民文學に於て、最も豊かなものは共同の詠嘆であつた。五人七人

の感動を同じくする群が、特に聲の清い舌の滑らかな一人に委托して、代つて眼前の情趣を詞章化せしむる場合に、必ずしも丁寧の叙述を要しなかつたのは當然である。殊に風光は到る處の岡や渚に、衆と共に楽しみ味ふべきものであつた故に、還つて之を見ぬ人に傳へるやうな、物語の發達する餘地は無かつたのである。従つて文學が少數の才子に由つてもてはやされる世となれば、その精彩の描寫は忽ちに彼等多數の同胞を動かして、却つて異國の文人の好尚に盲従して、自分たちの景色を品評するやうになつた。其弊や既に朗詠古今の昔に始まつて居る。この久しいマンネリズムの穴の底から飛出す爲には、我々は最も勉強して旅を試み又旅の試みを語らねばならぬ。白砂青松といふ類の先入主を離れて、自在に海のみを説く必要があるのである。

自分は松の名所を以て世に知られた中國の一地方に生れ、殊に目に映ずる鮮か

な縁、沖から通ふ風の響に親しみを待つて居る。しかも故郷に對する叛逆であらうともまゝよ、今以て全日本を通じて、海の歌海の繪とさへ言へば、是非とも松の木を點出しようとする古臭い行平式を憎むのである。内海の磯山松の他よりも一段と目につくのは、土や空氣の最初からの力もあらうが、やはり永年の松風村雨の致す所であつた。間近い都に鹽を焼いて供給を續けて居るうちに、何代と無く附近の林を伐つて薪にした。さうして土を流して岩の骨が露はれ、それが所謂御影石であつた故に、碎けて砂になつて濱邊を清くしたのである。海の景色は此あたりに於て、最も著しい歴史の變遷があり、眞率に言ふならば以前の方が明かに美しかつた。今のやうな經濟生活の續く限り、遅かれ早かれ他の府縣の海岸も次々に之とよく似た外貌になつて、結局は何人も文學の單調を非難し得ぬことになるか知らぬが、幸ひに現在はまだ土地によつて事情の變化が多く、従つて見馴

れぬ風景が尙保存せられ、我々をして再び省察せしめんとして居るのである。

中國の海の邊をあるいて居て、見落すことの出來ぬのは海の草の繁茂である。歌に玉藻と詠んだのは又別のものか知らぬが、一種だけ長く幅の細い、例へば蘭の葉の如くにして表滑かなのが、岸に打寄せると忽ち白く枯れて、風の後などは堆かく積まれて居る。岸近く船で行くならば、必ず濱の松の緑よりも珍しい光景を爲すことゝ思はれる。備前の邑久郡の入江なども、底は悉く此草で其間に海鼠が住み、小さなトロールは藻の上をすべりつゝ、其外に出た海鼠の限りをさらへて行くやうになつて居る。海が荒れる日は葉がきれて岸に寄り、追々に潟の上を埋めるらしい。西に開いた紀州の加太の湊なども、何處から吹寄せるか奥の方は此藻ばかりで、朽ちた土は沈んで干潟となり、片端ははや要塞兵の練兵場にさへなつて居た。諸國の入海の岸に住む民が、玉藻を茹るといふ昔からの手業は、之

を何の用途に充てたのかを考へて見た者も無いらしいが、それは恐らく田に入れて土を新たにする爲であつた。さういふ隠れたる海の交渉も、今は亦既に絶えてしまつたのである。

自由な花

海の草は磯の香といふものゝ元らしいが、浪に打寄せられて枯れ朽ちる時で無いと、旅をする者の目に觸れることが稀である。天草下島の魚貫(オヌキ)といふ濱近くに、夕日の最も美しい舟渡しがあつた。一丈餘りの水底は一面の草原で、絶えず靡いて居る植物の間から、色々の小石の光つて居るのが、恰かも花などの如く見えて居た。佐渡の島の東北端、鷲崎といふ静かな澗も、水澄んでさまざまの藻が茂つて居た。越後などから燃料の雑木を積みに、小さな船ばかりが入つて

來て繋つて居るが、晴れた秋の朝の船出などに、さし込む日の光を以て描かれる風情は、棹や櫂で掻亂すに忍びないやうな見事さであらうと思はれた。沙干に遠く現はれる東上總の磯の石疊は、ヒジキの薄緑が地の色を爲し、其隙々にトサカノリの幽かな紫を交へて居る。南の島に行くに隨うて、隠れ岩には次第に花やかな彩色を加へるやうだが、鷲崎の湊のあたりには冷たい潮が通ふ爲か、藻の緑は殊に深く、且つ葉の廣い北海の種類が多かつた。

佐渡も海府の果まで往くと、地上の草にも人間の跡がまだ少ない。彈崎(ハヂキザキ)の燈臺から西は、浪打際までが多くは草原で、遠く近く咲く花には取分けて珍しいものも無いが、何れも自然の聚落を爲して、此郊外の秋の野の如く入亂れては居なかつた。島ならば三反五反の廣さが、一面に紅か黄か、それ〴〵一種一色の花を以て覆はれた光景は、例へば紫雲英の田のやうであつた。無始の自

然が此様に播き且つ育てるのである。願(ネゲ)の賽の河原に接して、大野龜といふ龜の形をした孤丘が海に突出して居る。船路の目標でもあれば、帆前船の風の變り目にもなる爲に、屢々船方の唄の中に歌はれて居る。此小山が裾野からつべん迄、自分の通つて見た時には一面の萱草であつた。少しの白百合野茨を除けば山全體があつた朱色の花模様で、をかした話だが毎年の帝展に、屏風一杯に柿の實などを描く人の、丹念さを想ひ出すやうであつた。最も忘れ難いわすれ草の記憶である。

牛は盛んに放し飼ひをして居るが、全體に佐渡はまだ草の豊かな島だから、此様に花と花との間に、領分の境が出来て相争ふのであらう。それに人間が干渉をして、前栽と名づけた僅かな叢に七草を雜居させて見たり、甚だしきは一鉢の平たい土器に、小さくして悉く花を咲かしめようとする。世の調和といふ事業の中

には、往々にして馬鹿々々しく無理なものゝあることを感せしめる。凡庸な無名の草が、群れて美觀を呈するのも案外なものであつた。百合などの花ばかり大きく立派で、其幹は痛いけに細く、風も無いのに始終身を動かして、美を衒ひ知られんことを求めて居るのも、明るい海端の廣漠たる自然の中では、亦生存の必要であること、恰かも孤婦の装ひする如きものなることがよく解つた。

鳥の極樂

島である爲か、或は島の片蔭である爲か、佐渡の海府にはまだ幾つもの古い風景が残つて居る。海に迫つた山の端の斷崖には、六月潮の緑を背景として、薄桃色の石楠花が咲いて居る。阪を越える村人等は其の艶麗なる耀きに堪へず、思はず一枝を折つて、手に持つてやがて又棄てゝ行く。船から此花を見て行くやうな

山は、もう日本には他に無からうかと思ふ。

それから島の西岸を南へ進んで來ると、少しづつ水際に平地が出來て、やがては五戸三戸の近世の移住者が、絶壁を背にして家を構へて居る。海の生産は一年の活計に足らぬので、何れも崖路を登つて高地の田を作るのである。紀州の熊野なども同じやうに、沖から望めば一帯の沿海段丘であるが、佐渡での特色は屏風の如き山の端に、喬木の深く茂つて居ることである。山の田に灌漑した水の末が濁つた瀧となつて此間から海に落ち、無数の鳥類が傍の樹に憩ひ遊んで居る。波濤の音に競うて聲は最も高く、全く人間の危害から遠ざかつて居る故に、其動作が至つて自在である。北の大陸から毎年渡つて來る者の、此島を中宿とするのは蒼古以來の習はしであつたらう。雪の越後に比べては冬も暖いが、海が荒れて風強く、人は皆小屋の中に閉ぢ籠る。其上に色々の木の實草の實が、今尙豊かに供

給せられるのである。自分等は斯ういふ地形を鳥の極樂と名づけて居るのだが、佐渡のやうにあらゆる條件を完備した極樂は、さう多くは無いやうに思ふ。

東海道ならば由比蒲原興津の山々、焼津に越える日本峠のやうに、汽車の響と煙で小鳥を脅かし、更に色々の方法を以て捕獲を試みる處が、年を追うて増すばかりである。海邊の旅の寂しくなつた原因は、一つには禽鳥の零落である。保存法の制定が時おくれ、且つ周到で無い爲に、今日はもう搜して漸くに之を見出す迄になつた。大隅佐多の御崎山が、樹深くして木の實は珠を綴り、南から還るほどの鳥の群は、悉く此山に遊んで久しく留り、三冬連日の大舞樂場を現出して居ることは、曾て自分の驚喜して人に語らんとした所であつた。山の樹の成長は概して里人が伐つて薪に積むよりも遅いから、先づ通ひ易い海沿ひの林から、荒れて行くのは是非も無いことである。只幸ひにして魚附林の利害は、夙くから漁民

の之を感じ知る者多く、之に次では宮島や金華山の他にも、島に鹿猿を保護するもの少なからず、又神靈の尙あらたかな御社では、森は下草まで大切に鎌を戒めて居た爲に、單に遠望の略昔の姿を止むるのみにあらず、近づけば花あり樹の實あつて、此に遊ぶ鳥の歌も、幽かながら前代の歡喜を語るものである。但し斯ういふ境を拾ひ求める爲には、汽車や乗合自動車は僅かに半分の便宜である。村に草鞋を賣り、又は閑人の爲に小舟を漕ぎ路を案内する餘裕は、もう段々に無くならうとして居るのである。

砂濱の草

歴史以後にも日本の海岸は大變な變化をした。土が流れて磯を埋めた區域が、落込んだ部分よりはすつと廣かつたかと思ふ。浪華から中國へ掛けての新田には

中世まで白帆の船の走つて居たところが多い。大小の島々は塘に繋がれて陸地となり、其陰を今は汽車が往來して居る。併し是と同時に砂濱の威力も段々に怖ろしくなつた。風は昔も強く吹いたのだが、吹寄せて積上げる砂小石は、近代に入つて益々増加した。所謂長汀曲浦の風光の如きも、追々に改まらざるを得なかつたのである。

草木は之に由つて第一の影響を受けた。今日空漠の荒濱に、生き残つて居る草の花などを見ると、負けて還つて來た勇士を見るの思がある。日向の南の海岸を行くと、岩の蔭に隠れて尙色々の南らしい植物が生存して居る。其間を縫うて繁茂する葵葉の牽牛花などは、恐くは中頃民家の園から遁げて出たものでは無く、我々がまだ此花を栽ゑて賞美しなかつた時代から、既にこの附近の天然を占據したこと、例へば熊襲隼人の如きものであつたらう。鼓子花なども今は畠に入り路

傍に出で、やつれた可憐の姿を見せて居るが、それはたゞ埋没の災を避けんとし
て、海から遁げ去る後影であらうと思ふ。

濱に這ふ植物としては、葉の表が平らで滑りよく、枝に力があつて花を支へる
もの、例へば蔓荊の如きが永く生殖した。但し手に摘めば花の香は強烈に過ぎ、
木の形も荒く居る爲に、僅かに浦人が實を採つて枕に入れる位で、通例は之
を顧みる者が無いのだが、中央部以西の海岸の風景には、松を除けば此物が最も
多く參與する。三十年前に自分が此花を始めて知つたのは、參州の伊良湖岬であ
つた。千鳥の殊に多い砂濱で、廣々と東南の大洋に面して居る故に、薄暮が最も
幽寂であつた。此間に微風に乗じて、僅かに香氣を送つて來るものが蔓荊で、土
地では之をハマバウと呼んで居た。濱を匍ふこと時として一丈に餘り、小高い處
から見下すと優美なる砂上の畫であつた。花の色は淡い紫で、青空に翳せば殆ど

消えんとする風情がある。今でも處々の海邊で立止まつては見るが、其實は樹の
根の窪みなどに落ち集まり、少しの空中の水氣に助けられて、次々の血筋を用意
するやうに見える。多分は吹上げの濱の擴がつて行く限り、未來の日本の浪打際
の風光は、愈々此植物によつて支配せられ、歌によまれた白菊の花などは、今に
想像することも難くなるだらう。

玫瑰の紅

南部日本のハマバウに對立して、北に進めば則ちハマナスの花がある。支那で
は玫瑰は苑中の物であるらしく、花の艶麗は遙かに蔓荊に優れて居るが、我々の
間では曾て野生の境遇を出たことが無いやうである。汽車で海岸を走つて見ると
日本海の方面では鉢崎鯨波のあたりから、もう旅人の目を留めしめる。能登の磯

山にも咲いて居るかと思ふが自分には確かな記憶が無い。山形縣に入つては鼠ヶ關三瀬の邊から次第に多くなり、果もなく北の方へ續いて居る。太平洋岸でも常陸を過ぎて、磐城の濱づたひをすると急に此花の群が盛んになる。福島縣では小此木君の力で、特にその生態と景觀とが報告せられたことがある。東北一帯の海の風景は、勿論玫瑰を閑却しては之を談ずることを得ぬのであるが、如何なる法則が有るのか、其産地が妙に飛びくで、例へば釜石宮古間の海沿ひの路などは季節の稍終に近く通つて見たのに、此木に出逢ふこと甚だ稀であつて、北に進んで野田玉川のあたりの荒濱になつて、始めて處々に咲残つた花の群を見たのであつた。

全體に此木の多く在る處は、里や林を稍離れた、寂寞たる砂原が多かつた。風に吹き撓められた高山の匍松帯の如く、人の足も立たぬやうに密生して居る。山利郡の海岸などでは、防風用の松林の隙間から、紅の花がちら／＼と見えたこともあつたが、普通は孤立して自分の枝は無意味な茨である爲に、折角鮮明なる花の色も、傍の緑の葉と相映するやうな風情が無い。その代りには渺茫たる海の色日の光が際限も無く、幽艶の美を助けて居るやうである。八重の薄桃色の薔薇にばかり馴れた目には、古代な紅色の單瓣が、何よりもなつかしく感じられる。夏の北海の静かな眞晝、白い長い沖の雲を、此木の傍に休んで見て居るやうな心持が、まだ我々に残されてある歌だ。

ハマナスの根の皮は、採つて染料にして居る地方がある。北海道などでは實を貯へて食用とする土人が多く、寂しい旅の者ならずとも、親しみを感ずる木であつた。蝦夷の浦々にも到る處に大きな群があつたと謂ふから、夏場所の漁民等には、花の中に起臥した者も多かつたらうが、記録には取立て、其美しさを語つた

ものが無い。自分が旅中に見て来たのは、白糠以北の砂山から、釧路の港の後の岡などであつた。今は開けてあの頃の面影も無いか知らぬが、寒地に行くほどたけが高くなるのでは無いかと思はれた。砂地で無い原野にも、幾らも成長して居た。樺太ではアニワの灣内にも、オコック海の岸にも澤山あつて、名は同じくハマナスであつたが、木の姿と葉の形が、共に内地の様では無かつた。短かい夏の間繁殖の營みを終るべく、片枝は花が咲いて蝶などが來り遊び、其脇にはまだ小さい蕾もあるのに、一方は實が夙に熟して、綺麗な丹色を爲して垂れて居た。さうして大海の深緑が、其の昔から變らぬ背景であつた。

合歌と椿

濱に咲く花は此他にも幾らもあつたらうが、大抵は今は忘れて居る。僅かに殘

つた記憶の中を搜すと、男鹿の突角の高地、八戸の後の山、津輕の十三瀨の出口の野などでは、無數の蝦夷菊の野生を見た。花のたけは二三寸から五寸まで、淺とした草生地に、此花のみが踏むやうに多かつた。是も紫は至つて淡く、少しく遠ざかれば葉の色と一つになつた。町では花畠に植ゑられて大きくなり、紅白いろ／＼の變種も出來たが、同じ名で呼ぶのを見れば故郷の地も推測せられる。まだ見ぬ何れかの海邊にも、斯うして美しく咲き満ちた處があるのだらう。

海に臨んだ岡の片岨に、葛の葉の匍ひ渡つた處は方々にあつた。越後の海府なども汽車で夏通ると、山はこれ一色で杉も榎も覆ひ盡し、深紅の葛の花ばかりが抜け出して咲いて居る。山が荒れ始めると第二次の植物として、一時この蔓草の特に繁榮する時代があるのか。或は牧畜業の衰微などにつれて、斯ういふ偏重を招くものか。兎に角に是は大昔以來の、有りの儘の景色では無いやうに思ふ。

樹の花では合歡の木。これも日本海岸の廣い區域に亙り、海を見る磯山の端に茂つて居て、同じ頃にやさしい花を著ける。裾のさびしい上を向いた花だから、少し高みから眺めるのが美しい。石川縣では或時代に防風林を造る爲に、松と混植すべく盛んに合歡の苗木を育成したことがあつた。今二十年も過ぎたらあの地方の、珍らしい風景に算へられると思ふ。

それから椿の木は伊豆や熊野の村々では、餘りに有りふれて目にも留まらぬが寒地に向ふに従つて、次第々に風景に參與して来る。東北六縣の海の邊で、椿の繁茂する例は存外に數多いが、中部日本のやうに、自在には野山人里に散亂せず、大抵は一處にかたまつて、殊に岬の端などに、出来るだけ海に近く成長する。それが氣仙の尾崎や唐桑、或は秋田の椿の浦のやうに、附近に比べて特に溫暖な土地だけに、限られて居るのは言ふまでも無い。津輕方面では深浦の椿崎、小湊

の椿山などが珍らしいものに傳へられる。後者は近年の保存法に依つて、天然記念物として指定せられたが、此等の分布が果して天然であるか否かは、必ずしも既に解決した問題で無い。果して純然たる自生であるとすれば、曾ては北地一圓に、平均氣温の甚だ高かつた時代を想像せねばならず、人以外の者の運搬としては、互の距離が稍遠きに過ぎる。しかも南人が北の國に入つて来るのに、其習俗信仰と共に、兼て崇敬する植物の種を携へ、適地を求めて之を養育したことは決して五穀實用のものに限らなかつた。椿も亦特別の樹木の一つとして、社に栽ゑる家に移し、所謂園藝の先驅を爲した上に、若狭の八百比丘尼の如き廻國の傳道者が、手に持つ花の枝も多くは椿であつた。蝦夷が此地方を占領した昔から、特に後年神を祭るべき磯前ばかりに、椿が自然天然に生育したものだ、論斷する必要は少しも無いのである。

榎の林のこと

話はやゝ北方に偏するけれども、是非とも言つて見たいのは榎の林のことである。皮革工業が此様に發達する以前、自分等が知つてから後までも、北海道の平野は到る處此木を以て蔽はれて居た。開墾が進むと共に元の木はすべて伐られ、今は又新たな栽培を要するに至つたが、奥州の一角には却つてまだ昔の面影を存して居る。日本の榎は英語のオークとは別種であるか。晝で見るとやうな大木の話をかかず、又歐洲の諸舊國の如く、神話古傳の之に伴ふものは少ないが、木葉に飯を盛つた簡素の世よりして、カシハは人生と濃かな親しみを持つて居た。それが後漸く初夏の節供の方式だけに、此葉を採るやうになつて榎の山も衰微した。或は庭前に之を栽ゑる家はあつても、純なる林相は漸く見ることが難くなつた。

東京近くでは相州の奥の山に、近頃になつて僅かに其殖林が始まつた。

ところが岩手縣では閉伊郡の北端に、普代の官有林といふのが海に臨む段丘の上になつて、廣大な榎林であつた。六七年前に自分が通つた頃、世間の景氣に誘はれて賣拂はうとして居たから、是も今は杉扁柏に變つたかも知らぬ。それから尙遙かに北に向つて、外南部の東通村には、人が忘れたかと思ふ純林が残つて居た。それが又兼て想像もし得なかつた珍しい海岸の風景を爲して居た。今はどうなつたか、重ねて尋ねたいと思つて居る。

秋の初の頃であつた。自分は尻矢崎の燈臺を見て後に、山を越えて尻勞(シツカリ)の昆布採る浦に泊り、翌朝は姉弟二人の小童を案内に連れて、猿ヶ森といふ部落を見に行つた。路は南へ三里餘の平地であつたが、日の照る午前十時前後なのに、終に一人の通行者にも逢はなかつた。密林の端に小川が流れ、それを渡つて

曲ると俄に明るくなつたので、心付くところは榊の林になつて居た。其樹の大きさも葉の様子も、ほとんど東北でよく見る高桑島の通りで、今にも其邊から狗の聲、雞の羽音がするかと思ふやうであつたが、勿論幾ら行つても家も畑も無く、その淋しさは山中以上であつた。

海は此邊では廣大な砂濱を隔てゝ居る。榊林のはづれには小さな沼が、幾つとも無く一列に繋がつて居た。沼の岸を通るときには却つて心付かなかつたが、それは悉く昔の海の斷片であつた。地圖の上で見るとよくわかる。これから南方の小河原沼にかけて、曾ては一帶の長い潟であつたのが、砂に押付けられて萎縮して行くものと見えた。午後はこの猿ヶ森の村を辭して、田名部に戻らうとする村境の峠の上から、今一度振返つて東の濱を見た時には、こんな寂しい又美しい風景が、他にもあるだらうかと思ふやうであつた。見渡す限りの榊の林に、僅かの

村里などは埋れ盡して居る。切揃へたやうな緑の平面の外には、白々とした砂濱が横はり、外は大洋が荒れ狂うて居る。之とは反對に内側の、榊の林との堺には一列の静かな小沼が、譬へばエメラルドを緒に貫いた如く、きら／＼と光つて居た。晝にかくとしたら餘りに單純な、松にも巖にも縁の無い風景であつたが、自分としてはいつ迄も忘れ得ない。

風景を裁ふる

自分は僅かに殘存する前代の天然をなつかしむ餘りに、稍不當に人間の改革を輕視したかも知れぬが、要するに日本人の考へ方を、一種の明治式に統一せんとするが非なる如く、海山の景色を型にはめて、片よつた鑑賞を強ひるのは宜しくない。何でもこれは自由なる感動に放任して、心に適し時代に相應した新たな美

しさを發見せしむるに限ると思ふ。島こそ小さいが日本の天然は、色彩豊かにして最も變化に富んで居る。狹隘な都會人の藝術觀を以て指導しようとするれば、その結果は選に洩れたる地方の生活を無聊にするのみならず、兼ては不必要に我々の祖先の、國土を愛した心持を不明ならしめる。所謂雅俗の辯の如きは、言はず同胞を離間する惡戯であつた。

意味無き因習や法則を棄てたら、今はまだ海山の隠れた美しさが、蘇り得る望がある。力めて旅行の手續を平易ならしむると共に、若くして眞率なる旅人をして、今少しく自然を讀むの術を解せしめたい。人の國土に對する營みも、本來は花咲き水の流るゝと同じく、をのづから向ふべき一筋の路があつた。天然は始から、彼等に由つて破壊せられるやうに、用意せられてあるのであつた。しかも地理の學者は強ひて破壊と謂ふけれども、それは單に變更であり進化であつた。必

ずしも裝飾の動機を持たずして、人の加へた變更にも美しいものが多かつた。單なる人間味といふ點だけでも、荒野荒海の中に居る不安を、鎮め又和げる力がある上に、人の仕事は概して色彩の増加であつて、屢々之に由つて原始の一本調子に、快よい變化を與へて居たのである。

だから日本の近世の風光にも、尙人間の干涉に多謝すべきものが多かつた。例へば農業は植物の種類を複雑ならしむる所の作業である。緑一樣なる内海の島々を切開いて、水を湛へ田を作り紫雲英を蒔き、菜種麥などを畠に作れば、山の土は顯れて松の間から躑躅が紅く、其麥やがて色づく時は、明るい枇杷色が潮に映じて搖曳する。雲雀や雉が林の外に遊び、海を隔て、船中の人々が、其聲を聴くやうな日が多くなる。濱近くに多くの家が群がり住み、歌ひ笑ひ燈火を高く掲げなかつたら、月無き夜の濱の景色は、今よりも遙かに寂しかつたらう。伊豫の西岸

には新たに山腹を耕して、桑を栽ゑる風が入つて來た。即ち桑の葉の若い緑は、珍しい春色を此地方にもたらしたのである。

其他舟を繋がんとする岸には垂柳を移し植ゑ、山に新道を開けば路の曲りには小家を立て、多くは若干の花の樹を栽ゑる。必ずしも海の入日の前に散り亂るゝことを期せずとも、自然に其様な情景を催して、旅に倦みたる者をして佇立せしめる。自分などの生れた國では、花は山に入つて尋ねて見るもので、寺か社で無ければ庭前に之を賞する風は無かつたが、好事裕福の俗人が名聞の爲にでも、閑靜の地に家を構へ、若くは人が公園など、稱して、高い處を切り平げて赤土にする時、そこに大抵は早く成長する梅櫻の類を栽ゑずには居ない。女や子供の立寄つて悦び見るばかりで無い。それが若し大海の岸に臨んで居たならば、海自身も亦その千古の寂寞が、かゝる無邪氣なる人間の遊戯に由つて、僅かに一展開せん

とする形勢を悦ぶことであらう。

(大正十五年六月、太陽)

豆手帖から

仙臺方言集

仙臺の土井教授の夫人が、最も新らしい型の仙臺方言集を作つて我々に見せられ、又世上今日の奥様方に、奥様にも出来る仕事の最も上品な一例を示されたことは、一年経つたからもう忘れても可いといふやうな小さい功績では無い。外國には此方面に所謂男まさりの研究者が随分有つて、自分等が僅かの調査をして得意にならうとする際などに、折々苦笑ひをして發奮させられるやうな本を著して

居るが、日本では先づ一般には尙準備時代であるやうだ。方言とか俗信とか云ふ緻密な観察の入用な學問には、髭の無い人の方が或は適するのかも知れぬ。どうか早く静かなる一隅の努力では無く、皆で集まつてこんな問題でも討議するやうな國にしたいものだ。

御婦人の御話に口を出すのは失禮だから、其流行の始まらぬ今の内に申して置くが、方言の問題で第一に決せられねばならぬのは、何よりも先づ「方言とは何ぞや」であらう。大學で聞いたので無いから確かでは無いが、東京の如き集合地に久しく居て見ると、首府以外の地で使ふのが方言だと、簡単にきめてしまはれぬやうである。然らば古い形に最も近いものとか、又は最も多數の人に用ゐられる形とか、どう謂つて見た處がさう容易く、標準語が見出されるものでは無い。早い話が「然り」に該當する京都のヘーが、九州の或地域のエーだのネーだの、或は

北東日本の、ハイだのアだのを排擠して、標準と爲るだけの資格がどこに有るだらうか。

其にも拘らず、果して單純なる大膽さの結果かどうか。地方の教育者の方言蒐集は、常に所謂匡正を目的として居つた。幸ひに成功はしなかつたが、之に由つていゝ加減乏しい國語の數と、言現し方の種類とを削減しようとした。しかも最も耳に附く發音法や抑揚には其力が及ばなかつたのである。假に方言匡正家の所謂標準語を繋ぎ合せて、物を言つて見たら如何であらうか。丸で書物で日本語を稽古した外國人の話のやうな感を、與へずして止まぬではあるまいか。同化の力としては恐らくは文學が最も有力であつたらうが、その文人とてもやはり多數の東京人と共に、漠たる見當に向つて絶えず我が言葉を矯正しつゝある、田舎出の諸君ではなかつたか。

野鄙と風雅との境界線に就ては、將來も久しく大議論が続くであらう。併しそんな差別は我々の高祖も想像せず、末孫も感じ能はざる差別である。況んや一步仲間から外れて考へると、同じ時代に於ても尙不可解で、我々はアイヌの社會に、沙留と石狩とがどれだけ異なるかを知らぬのである。方言で謂つて見ても事實は一樣で、如何によく似て居ても沖縄では琉球語を獨立した言語とし、與論島や鬼界島では方言と爲るのは、結局は「此で好いのだ」と思ふと思はぬとの差である。もつと適切に申せば笑はれる語、匡正したくなる語が方言である。従つて國民の結合が強くなつて、次第に顯著なる現象が方言、方言の注意せられるのも國運隆盛の一兆候と謂ひ得る。北米合衆國の國語はあの通り出處が明かで、仙臺語と東京語とよりも遙かに距離は近いが、何人が之を英語の方言と名づけやうか。要するに笑ふと承知せぬ人々が、之を使つて居るから獨立した國語なのである。

斯うなると標準語の決定と云ふことは、愈々容易ならぬ問題に爲つて來る。例へば仙臺の語彙と用語法とを集めて方言集と題するのが、當を得て居るか否かと疑はれる。自分は仙臺に來るたびに此都會の都會らしさを感じる。帝都でも無いのに森のミヤコと呼ぶのは、方言以上に感服せぬが、兎に角完成したる大城下町である。教育者はどうか知らぬ。其他は軍人でも商人でも、靜かに微笑しつゝ、些かの煩悶無しに仙臺辯を操つて居るらしく見える。さうして少しは他國者の物言ひを笑つて居るらしくもあり、又永く住む者を同化する力も有る。まだ決して方言とは爲り切つて居らぬのである。源氏の夕顔の卷などを見ると、都人の田舎に制御せられたのも久しい昔からである。願はくは將來大に東北を振興させ、清盛の伊勢語、義仲の木曾語、六波羅探題の伊豆語鎌倉語、室町の三河語等の力を以て、今の京都辯を混成した如く、近くは又北上上流の輕快なる語音を廟堂に聞

いたやうに、少くとも一部の仙臺藩閥を、東京の言語の上にも打立てしめたいものである。

失業者の歸農

東京大阪で失業々々と頻りに謂ふのは、新聞の誇張では有りませぬか。此村なごでは近年随分出て行きましたが、まだ一人も還つて来た者は有りませぬ。是が私を泊めてくれた家の、主人の方の疑問であつた。何だか知りませんが、一年増しに奉公人が少くなるのには困りますと謂つて、細君は頻りと立働いて居る。豊かな家庭でも款待の意味で、主婦が出て世話を焼くのは、質素な東北の舊家の慣例ではあるが、其爲ばかりで無いことは容易く想像し得られた。

此邊などは如何なる人夫募集員が來ても、決して成功すべき土地では無い。出て行く者は毎に自分の考へから、例へば家の姉にしつかり者の婿が來たとか、母親が違ふとか、或は此よりも今一層微妙な感情から、居りたく無い故に出て行くので、非常に零落するか(小農にはもう零落の餘地も無いやうだが)、又は非常に立身しなければ、まづは還らぬ積りなればこそ、遠方へは往くのである。生活上の壓迫と謂へば他の地方も一つだが、拓くにも作るにも地面が無いと云ふ村里から、剩つて出て行く者とは事情が丸で別である。併しながら原因はいつれであつても、去らねばならなかつた元の村へ、満期の兵卒や伊勢参りと同じやうに、用が無くなれば戻つて來るものとは、どうして又考へたのであらうか。自分等は時として此類の政治家の心持ちを疑ひ、或は知りつゝそんな氣休めを言ふのでは無いかとも思ふ。さうで無ければ餘りに無識なる臆説である。移民を渡り鳥か何ぞの如く思つて居る。同情の無い話である。

或は又製絲と織物の工場だけはよろしい。労働者が多くは女だから、と云ふやうな説も有つた。女なればどうして元の村へ還るのか。又何をしに還つて來ると謂ふのであるか。十三四五から縫針の稽古もせず、稚ない者の泣く理由も經驗せず、同じ年頃の者とはばかり笑つて日を送り、田植稻刈は勿論のこと、女房のする仕事は三分の一も知らぬ女を、普通の農家が何で嫁に欲しがらう。多くは戻つて來なかつたのと同じやうな、身の片付をするにきまつて居る。元に溯れば必要が有つて、村から外の工場に雇はれに出た者が、罷められて途方に暮れぬ筈が無い。町の長屋の女たちの内職を見ても分ることだ。軽々しく出たから軽々しく、原狀恢復が出來ると思ふのは、誠に無責任な遊民増加策で、且つ工場主の我慾を辯護する者である。

おまけに所謂歸農は必ずしも目出たいもので無い。自分は痛ましい實例を知つ

て居る。越前灰帽子峠の口の秋生(アキウ)などは、男は鑛山の出稼が本業で、女ばかり多い淋しさうな村だ。其をどうして知つたか毎年大阪の工場から、一人に付何圓かの歩を貰ふ募集員が來たり、又は前に出た娘に手紙を書かせたりして、年頃の者を澤山に連れて行く。大阪からは中形の浴衣で寫した寫真などが來るのに、山村の生活は荒くして且つ苦しい。山坂を登つて僅かな畑を作る爲に、肥料は小さな桶でちやぶく／＼と肩に掛けて運んであるくと、時として若い嫁娘の黒髪に天下最悪の香水が滴ることもある。斯う云ふ中に著るしく目に立つのは、折々日向の障子を一枚あけて、色の蒼白い者が坐つて旅人を見て居ることである。此村では若い婦人が死んでいけません。三人や五人では無いのですと、駐在の警吏も惜しさうに語つた。一人も残らず何かの纖維工業に働いて居た者だと謂ふから都市の埃の中に初めから育つた者よりも、空氣のよい山村の住民は、或は却つて

抵抗力が弱かつたのかも知れぬ。折角の佳い風景の中へ、死に、還つて來たのは憫れだが、もし又中位の健康で永く村に居たらどうであらうかと、戦慄するやうな結果が想像せられたのである。

人間が増してどうしても出るのが制止せられぬなら、永く行く先に落付くやうな方法を、是非とも考へて置いて遣らねばならぬ。三月や半季の土工人夫などに世話をして、職業仲介の公務が完うせられたと思つてはならぬ。歸農も固より勞働の一機會ではあるが、棄て、置いて元穴へ入つて行くと思つるのは、恕し難い無理である。一旦あけ渡した空隙は必ず何物かゞ充して居る。別に新たに設けてやらなければ迷ふのが當然だ。當節は農民は何處へ行つても同じ農民である代りに、村に占領せられず村に利用せられぬ國土は殆ど無い。有形無形の加入金を徴收せず、カリホルニヤ人と正反對の態度で、他所者を迎へるやうな村などは作

らなければ自然には一つも無い。之を知らずに歸農を説く人は、氣の毒と云ふよりも寧ろ憎い。

子供の眼

目が心の窓だと云ふ諺は、旅をする者には一番よく分る。二十の紹介狀五十の名刺を配つてあるくよりも、更に遙かに好都合なのは、自分の心の窓の磨硝子で無いこと、田舎の窓の風通しの良いことである。よく旅から歸つて、某地は人氣が善い、悪いのと云ふ人も、其確信を證據立てる迄に、多數の地方人と交渉又は取引をしたのでは無い。やはり口では言ひ現し得ぬ目の交通が、次第に空な感じと思はれぬ迄に、強く其印象を與へるからである。電車や汽車の中でも色々な眼の光に接するが、其は主として草野を行くやうな變化の興味である。之に反し

て村里に入れば、其種類が略揃つて居るために、愈々言語に代る程度に、濃厚に人を動かすのである。

窓の譬を猶繰返すならば、旅人は別に所在も無い爲に、終始此窓に凭れて居るのである。其窓前を多数の内部を知らぬ建物が動いて行く。建物には各又窓がある。覗かずに居られぬでは無いか。又あちらでも窓の側に立つて居るらしい。勿論中で喧嘩をしたり晝寝をしたりして居るのも随分有るが、元々斯ういふ旅人を見る爲に開けて置く窓だから、一寸でも利用しようとするのが普通である。全體に口の少ない社會だから、我々が言語を備ひ又は耳を利用するやうな場合にも、人々は目の窓だけで済まさうとする。従つて見る爲よりも見られる爲に、語る能はざる者を語らんが爲に、田舎の眼は遙かに有効に用立つて居るやうである。都會の目は多くは疲れて居る。此方では澄んで居るから中の物もよく映るのであらう。

う。民族性と云ふ程のものでは無いであらう。

小兒には何十回と無く、目を以て商賣を問はれ行先を尋ねられ、又は手に持つ本や煙草の名をきかれたが、別に其以外に其よりも交渉は淡く、人間としては遙かに有力なる宣言を、今度の旅行にも此眼を以て二度聽いた。石巻から乗つた自動車が、岡の麓の路を曲つて渡波(ワタノハ)の松林に走り附かうとする時、遠くに人と馬と荷車との一團が、斜に横たはつて休んで居ると見た瞬間に、其馬が首を回して車を牽いたまゝ、横路に飛び込んだ。小學校を出たばかりかと思ふ小さな馬方が、綱を手にしたまゝ、轉んだと見た時には、もう其車の後の輪が一つ、ちやうど腹の上を軋つて過ぎた。それでも子供は眞直に立つて、三足ほど馬を追つて振返つて一寸此方を見て、腹を両手で押へて又倒れた。反對の側の輪に力が掛つて居たともいひ、路面に深い凹みが有つて、恰も其中に轉んで居たからとも謂つ

て精確で無い。兎に角病院に連れて行かれて其時は助かつたが、只の一瞬間の子供の眼の色には、人の一大事に關する無数の疑問と断定とが有つた。其中で自分に問はれたやうに感じたのは、折も折此刻限に、どうして爰を通り合せることになつたかといふ疑問で、其が又朝から色々の手配の狂ひ、計畫の數回の變更が、ちやうど此場へ今我々の自動車を通らせることに爲つたのを、一種の宿命の様にも取ることが出来たからである。

中一日置いて次の日には、自分は十五濱からの歸りに、追波川を上つて来る發動機船の上に居た。大雨の小止みの間に、釜谷の部落を見ようとして甲板に立つと、曳船を頼むと謂つて濡れた舟が一つ、岸に繋いである處へ一群の人が下りて来る。石巻の醫者へつれて行く窒扶斯の病人と聞いて、事務員が面倒な条件ばかりを出すのを、一々首を以て承認して釣臺を擔いで乗らうとする。年とつた女が

二人附いて来る。荷の軽さが子供らしいので、成るべく此窓だけは覗くまいとして居たのに、やはりはずみ^が有つて其子供と眼を見合せた。今昔物語に鹿の命に代らうとした聖が、獵人と松明の光で見合せたと云ふ類の遭遇で、殆ど凡人の發心を催すやうな眼であつた。多分は出水の川船の數里の旅行の後、石巻で亡くなつたことゝ思ふが、それは十一二ばかりの女の見であつた。草の堤を稍下りに、船を見ようとして私を見付けたのである。眼の文章は詩人にも譯し得まいが、或は自分を醫者かと思つて、御醫者さんなら遠くへ往かずともすむのにと、考へたらしかつたのが哀れであつた。

こんな場合でも無ければ、子供の眼は常に幸福である。よその多數の幸福を知らずに、安々とした眼をして居るのが、旅人に取つては風景よりも歌謠よりも、更に大なる天然の一慰安である。

田地賣立

吉川子爵は宮城縣の各郡に、大分の土地を持つて小作させて居られる。一寸意外のやうだが尋ねて見ると、相應に因縁は有るものである。特に興味を喚起す程の歴史でも無いが、つまり陸前低地の一帯に散布する巨大なる地主と、單に占有開始の年代を異にするのみと見れば間違は無い。迫川の岸に接した一農場は、細田氏と云ふ人が實際の管理をして居る。細田君は遠田の農學校の出身で、自身も屈強な農夫である。六十町餘の田を五反八反づゝ、近村の農家に貸渡して、今では五町と畠一町を作るばかりだが、十年前には三十何町を自分で小作したこともある。有名な東北凶作の後、人の手が剩つて二百人三百人、日雇志願に押掛けて斷るに困ると云ふ有様であつたから、多くの年季男も置かず、此ほどの大面積を

三日足らずに植ゑた年も有つたが、明治四十二年を堺にして、不思議にぱつたり來なくなつた。而も此縣には今尙數人の年季雇と數百人の日雇とを働かせて、十町十五町の田地を自作する地主も稀では無い。年季雇の様式には古風な點が多いさうだ。何時迄續かうかと地主自身も謂つて居る。日雇を使ふ方が追々増加するのは、至つて自然なる趨勢である。それには若干の小作地を與へて、附近に住附させる方法もある。何れにしても雇傭の條件が面倒になれば、此次には小作が増加するであらう。

小作は土地も悪いが、借料も中部日本と比べて低廉である。米價が昂つて小作希望者の競ひ進んだ時代にも、格別之を奇貨として引上げようとした地主は無かつたらしい。察する所大地主には小作人を離散させてはならぬ緊切な利害が有る爲で、従つて三流四流と爲ると其影響を受けて、純然たる小作収入では計算が立

たず、自作をしようにも氣力と方法を缺くと云ふ類の、中途に迷うて居る者が多いことと思ふ。それにも拘らず小作人の小地主になりたがる希望は近年却々強く且又之を促した原因も有つた。土地の糶賣は即ち是であつて、小民は寶物でも持つ考へで土地を欲しがり。如何に米が高くなつても、郵便貯金の利子にも足らぬやうな法外な金を拂つて迄も、多少關係ある田地を人に持たせまいとする。他府縣でも聞く反千圓の相場は、陸前のヤチ田にも稀で無かつた。よく言つても經濟知識の缺乏、悪く言へば病的の現象だが、どうせむだ使ひに棄てる金だとも辯護する人があるかも知れぬ。兎に角に斯うして手に入れた田なら、よく／＼でなければ賣放すまい。つまりは誰かの希望のやうに、至つて確かな小農地主の出來たことのみは事實で、只それ迄に土地の所有に戀焦れる者に、何とかして一反の金で二反の田を、持たせて遣りたかつたと思ふのみである。

昨年秋とかに古川町の芝居小屋で、大規模の田の糶が行はれた。數週前から賣るべき田地を一筆毎に、所在番號其他を掲げて公告し、尙印刷にも附して弘く廻したやうである。骨董品より始末の悪いのは、欲しい人にあきらめと算盤との無いことである。其上にまだ仲に立つ才取のやうな者が有つて、鞘を取つて賣るつもりで、一時買つて置いて又糶らせる。小さくすればする程高く賣れるとは當然の事ながら殊に氣の毒笑止である。斯んな例は決して二回や三回で無い。先づは米高初期以來の地方的流行であつた。一時中絶して居ても又起るに相違無い地主に取つても利益のことでは無く、門閥の大本に根廻しをするやうなもので、もし其賣上金が紙數ばかり多い此頃の株券にでも變つて居れば、あまりに靚面な結果であつた。社會から謂へば自作の出來ぬ地主などは無くてもよいが、評價の一點だけには何としても遺憾が有る。今十年も待たせて置きたかつた。

或は此縣の土地事業を中止した荒井泰治氏が、持地を處分した方法が眞似られたので、同氏を此流行の鼻祖とすると云ふ一説もある。夫は多分荒井氏が慧敏で且つ時々は兩國の美術俱樂部などに行かるゝ爲に立つた噂であらう。東北地方で参考にするなら、何も清辰の輩を煩はさずとも、附近に若駒の糶庭と云ふものがある。之と比べて違つた所は僅かに一點、駒では賣主が愚直の農民で、買手が横着慾深の馬喰なるに反し、田では買手が更に無思慮な小作人であることである。

狐のわな

「なアに、あの木は皆胡桃ではがアせん。此邊でカツの木と謂ふ木ですが。燃すとばちくとはねる木ですが。」

「櫻はもう見られなくなりました。元は此山などは、春になると花で押けへすやうでがした。今の人たちは花の咲く迄、おがらせて置かないから分りません。」

「獸かね。當節はもう不足ですが。なんに、鹿なんか五十年も前から居りません。元は貉が出て豆を食つて困りました。狗を飼つて居て、よく噛み殺させたものでがす。」

「其内に狗が年イ取つて、齒が役ウせぬやうになつてしまひました。横濱のアベ商店に賣つてるとつて、機械を買つて來て使つて居たのでがす。なんに、三寸くれエの、眞中に圓いかねが有つて、ちよいと片つぽの足をのつけると、かたりと落ちるやうになつた、虎挟みと謂つたやうなものでがした。ベイコク製だと謂つて居りやした。十年も使つて、何と、此春しよう分を受けて、御上さ取上げられてしまひやした。」

「悪いこつたと知つて居れば、匿すのは造作も無かつたのでがす。二月に其機械

で狐を二匹捕つて、すぐに町さ持つてつて賣りました。さうすると飯野川の警察から喚びに來たから、何だかと思つて往つて見ると、罰金を五十圓出せばよし、金が出ねエなら五十日來て稼げと言ひます。

「子供に金エ遣はせるでもねエ。おれもまアだ達者だ。往て稼いで來べいご申しやしたら、今まで一ぺんも牢に入つたことも無い爺様に、七十にもなつてそんなことをさせたくねエから、心配すんなと申しやしてね、持つて來て五十兩出してくれやした。

「一ごきき持つてくに及ばねエ。切つて出してもいゝのだと、教へてくれた人もありませんが、面倒くせエから皆出して來やした。さうか持つて來たか、そんだったら裁判所さ届けてやるべつて、よく顔を知つてる巡査さんが、書付を書いてくれまして、機械と五十圓とですんだのがす。

「あんなよく出來た機械は、もう無いだらうつて言ひます。法律が有るなら仕方が無い。只一ぺんは知らせてくれ、ばいゝのに、惜いことをしました。

「斯んな一軒屋に住んでるもんで世間を知らねエ。わし等ア別に此澤を開きに入つた者ぢや無いのがす。二十年も奉公して居た旦那の家の桑島が、元から爰にござりました。つまり桑の番人のがす。倅どもはそちこち出てしまふ。外に行く處も無い。婆様が居なくなつたから、末の娘に飯を炊かせてエともつて、婿をめつけたのがす。

「さうでがす。喧嘩をしても仲裁に來てくれる隣が無いから、うつかり喧嘩アしられません。ハハハ。

「是でも路端に近いので、時々人が寄つて來ます。あんたのやうな忘れ物をした人もあれば、自轉車が毀れて困つた衆などが來てね。鐵槌は無いかだの、釘拔を

貸せのと言ひます。中には空氣ポンプは無いかなんて謂ふ者が度々有りますからそんなに入用な物なら、をれは乗り様も知んねエが、一挺買つておくがいゝとつて、置いてありますよ。

「雷様が急に鳴り出すと、きつと誰か駆け込んで來ます。雨が歇みさうにも無いと、傘を貸すこともありません。」

「なアに、大抵は通るのは知つた人ばかりだ。一べんだけ一昨年、だまくらかして持つてつた人があります。飯野川をよく行く店の若え衆だと言ひました。買つたばかりの傘だが、まだ其頃は安かつた。夫でもあんまり久しく届けて來ねエ。町さ出た序に廻つて貰つて來べいとつて、をら自分で行つて見ました。さうするとさう云ふ人は居ねエつて言ひましてね、全く店の名をかたつたのでがした。遠方の者だらうと云ふこつてす。をれは此年まで、石巻までもめつたに出ねエ者だ

が、をれの馬鹿なことはよつほど遠く迄聞こえてると見えるといつて、家で笑つて居たことですが。

町の大水

宿に着く頃までは、雨はひどかつたが靴の汚れる程の路でも無かつた。其が遅い晝飯を食ふ時分には、向側の町役場の前で人聲がして、出て見ると救助の小舟を物置から擔ぎ卸して居る。愈々水が來るかなと思ひながら、風呂を知らせて來たから往つて入つた。番頭はよく話をする。それでも後には水の話に爲つて、今年が七年目ださうですからなご、少しは心配さうである。

髭などを剃つて居るうちに、外はもう暗くなつた。ちやぶりくくと水の音をさせて歩く者が有る。最初は子供がわざと水溜りを通るのかと思つて居るうちに、

段々と音が大きくなって来る。手摺の上から西東の通を見ると、町は早家々の燈火が映る迄に爲つて居た。其うちに大掃除の時のやうな音が下です。畳を揚げ出したのである。空いて居た隣の室に、病人づれの下の客が引越して来て、溜息をつきながら床を取つて居る。困つた困つたなど、云ふ聲が聞えたが、やはり程なく自分と共に、闇を透して水の様子を見ようとして居るのである。向の町役場には高張がつき、提灯が折々出入りをする。

翌朝眼を覺ますと、もう手水場にも行かれぬやうになつて居た。町の水は下手から流れて来る。本流が高くなつた爲に、其へ吐き出す筈の水が皆戻つて来るのである。色々の板切れなどが浮いて上手へ行く。此方の様子は柳が蔭になつて却つて見えないが、向の家々は二階の雨戸を少し開いて、何れも無邪氣な小兒の顔が、二つ三つづゝ覗いて居る。飲水の手桶を庇の屋根に上げた家もある。坊主頭

に鉢巻をした爺が、竹を杖に突き着物を臍の邊までまくつて、三度も四度も水中をあるく。それが何をするのかは終に分らなかつた。

やがて各種の筏が通行する。巡查や消防方も澤山に出て居る筈であるが、他にも急場があると見えて、根つから姿が見えぬ。此邊に来るのは非公式の筏ばかりである。椽臺を裏返したのもある。又何とも知れぬ板や棒の類を急ごしらへに括り合せたやつで、途々材料を拾ひ上げて改造しようとする者もある。鹽舟も幾つか出て来る。全體に取敢へず出て見たと云ふ風で、二階から眺めて笑ふやら、笑はれて急にふざけ出すやら、筋向ひの金満家の屋根では、小旦那が上つて寫眞を撮る。小僧が頼まれて可笑しな風で乗りまはす。誠に呑氣な災害で、何だか面白づくの顔付が多い。偶々用の有りさうな人は、却て筏も無く衣物を高く揚げて水中を涉つて居る。

隣室の女の病人は近在の人ださうだ。欄干に近よつて自分も笑ひながらだが、村ならこんな事は無い。百姓は一生懸命なものだ。我家が早く片付けば、ちつとでも人の分を手助けしようとする。だから後でがっかりするのだなど、頗る所感を述べて居る。それを平氣で聞きながら、番頭や女中も客と同じやうに、長い衣物で水の流れるのを見て居る。あゝもう村のやうな水は飲めない、不意に病人が歎息する。なるほど斯うして濁流を眺めて居ると、自分等にもそんな心持が起る。

此出水は一日だけで、夜の中に宮城縣の方へ引いて往つてしまつた。翌朝は町に足駄の音が聞え、日はかん／＼と照つて居る。早速汽車に乗つて出て見ると、市街が乾し物で大騒ぎであつたに反して、在方では麻島も桑島も眞白な泥の下に爲り、どうして元の美しさに復らうかと、案じ煩ふ如くに見えた。第二の町では

出水が一層急であつた爲に、被害は數倍の甚だしさであつた。橋が墜ちて其袂の大きな家は、土臺石が流れ柱が傾いて居る。濡れた糶や玄米が二三石分ほども路の上に干してあり、腕組みをした人が何人も其附近に立つて居る。其でも早その橋跡の小川の岸に来て、屈托の無い顔で釣をする者が若干ある。村であつたら實際後から突飛ばされたかも知れぬ。

安眠御用心

どうしても寝られぬ晩があつて、斯んなつまらぬ事を考へた。

宿屋の表二階と云ふやつは風情の多いものだが、蚤の多い晩だけは賛成しかねる。殊に東北では雨戸を立てないから、凡そ町中の一夜の出来事は、悉く枕頭に響いて来る。先づ皿小鉢の甲高な音楽がすむと、女中の叱られない家なら赤ん坊

が啼く。表を締める前に一しきり、涼みがてらに路を隔て、向の家と話をする。若い衆が笛を吹いて通る。わさく〜と何處でか立話の聲がする。早起の家の起きる時刻と、宵つばりの家の寝る時刻との間が、夏は誠に短い短夜で、其間に狗が吠える。鶏なども決して目覺し時計のやうに精確なものでは無い。電燈の結果か東京では十一時頃にも鳴く。此町でも一番鶏が一時前だ。散々羽ばたきをし且つ鳴いて置いてから、彼等は又ぐつぐつと寝るらしいのである。本當に憎いやつだ。肉や卵の目的が無かつたなら、何で斯んな動物を飼ふかを疑つてもよいのである。然るに此以外に、寺に頼んで一時間毎に鐘を撞かせる。夜番と稱して折角静かな雪の晩などに、間斷なくごならせる。拍子木を叩かせる。自分等の解し得ないのは、之をしも名づけて町の平穩を保つ手段とすることであつて、殆ど夜寝ることを平和以外の事業と見て居るかごさへ恠まれる。「眠よ何故に我を見棄てし」

と、歎息した王様が一人でも既に有つたとすれば、もう此現象は一の社會問題であつた筈で、さうしてまだ解決せられては居らぬのである。

歴史に溯つて見ると、警戒は生存の一要件であつて、又團體生活の提供する一大便宜でもあつた。雁や海鹿は一個の代表者に警戒の責任を負はせ、他は皆寝るから勞力の經濟のやうだが、其代りには時々襲はれて打殺され且つ食はれる。人が森に住んで猛獸までを敵にして居た時世には、静かなる眠は最大の危険であつたから、乃ち火を焚き之を取圍んで色々の話をして、所謂睡魔の來り侵すを防いだ。人類にこの夜番と云ふものが無かつたら、多くの面白い傳説は傳はらなかつた筈である。南洋のボルネオなどは、赤道直下の常夏の國だが、其でも土人は山に入ると火を焚き、火を焚けば終夜話をして、少しも寝ようとしなかつたさうである。さうして晝間一人に爲ると、到る處に轉げ込んで休息するには困つたと、

ローレンス博士のニウギニア探検記にも書いてある。

つまり前代の我々は永く寝ては大變だから、成るだけ四邊近所を物騒がしくして置いたのである。蚤でも蚊でも必要な機關だ。曾て或老人が若い者に言つて聽かせて居た。若し蚊と云ふ者が居なかつたら、御前達はきつと外でばかり寝て、さうして身體を悪くするだらうと。此意味から言へば、蚤も亦天然無代價の枕時計であつて、只近世の鶏などと同じく、聊か時間の正確で無いのを遺憾とするばかりである。之を厄介物視するが如き輩は、果して國民中の零コンマの零々何%有らうか。多數の健全分子、即ち起きて居て些しく眠り、寝て居て些しく起きる必要の有る人々に取つては、夜暗に此類の觸覺聽覺の刺戟の有るは、恰も白日の下に花有り胡蝶有る如く、寧ろ單調生活の芝生に於ける、一種飛石のやうなものである。

然るに僅かばかり西洋の慣習を學んだ者が、いや鍵を掛けるの壁にしろのと、行はれもせぬ旅館改良論を唱へるのは、本末を誤つた紋附シルクハットの滑稽で原首相の所謂日本の國情に合せざる外來思想の一つである。個人警戒の必要を根絶するか、代表警戒の全責任を負うてくれるか、乃至は人民の過半数を不眠黨に編入し得た後で無ければ、そんな獻策は空想と謂ふものである。日本現在の諸制度は、今尙よく寝られて困る人々の爲に、出來て居るといふことを知らないか。

古物保存

陸中人首(ヒトカベ)の村長さんは、故千家尊福男に少し似た白髯の翁である。自分はこの無口な老人に一言をも費さしむること無くして、一目見て直ちにそれが沼邊氏の遺臣であることを知つた。即ち偶然に討死をしなかつた勇士の子孫で

ある。人首の嶺の北は徑に富んだ小友の山地である。天下が若し亂れたとすれば徒らに麓の館に立籠ることは地形が許さなかつた。即座に峠を越えて隣領に、小勢を顧みず斬込まねばならぬ大切な切所で、それ故にこそ所謂頼みきたつたる宗徒の面々を、伊達家でも此邊境には置いたのである。

今日既に無用に歸したのは、單に過去の理想の壯烈さだけである。世の中が變つたとても、邑人が引續き舊物を敬愛するには些しも差支が無い。唯日本人が之を名づけて史蹟記念物の保存と謂ふ場合のみに、自分等には若干の異議があるのである。保存と謂ふからには棄て、置けば亡くなる物で無ければならぬが、萬人仰ぎ視ることも云ふべき人首唯一の話柄に、果して保存の必要が有るかごうか。高輪の泉岳寺が今の倍數ほどの借家を建て、同時に門前の御土産屋が一軒も無くなつたとて、府や市が石の榜示を立てなければ、四十七士の切腹所の不明になる危険は無い筈だ。そんな事を言ひながら、冷淡な遠國人などの、氣が附かずに通り過ぎようとする者の耳を引張り、何でもかでも此話を聽かせようとするのではないかな。

所謂訓育的效果に隨喜する一派の老人以外、古物保存には何の爲に保存するかの問題がある。我々の子孫は概括的には我々よりも賢い筈である。賢くなつて後猶考へて見ようにも、夙に其材料が亡びて居ては甲斐が無い。だから保存する必要があるものと我々は解して居る。さうすれば形の無い物は有る物よりも遙に消え易い。筆豆でも口豆でも無い人だけが知つて居て、今にも空間に飛び去らうとする多くの昔話が、この江刺郡の山村にも澤山あることを、自分は偶然にも友人から聞いて知つて居るのである。然るに役場の報告の控を見ると、只館山と五輪峠とだけが注意せられて居る。あまり數が多過ぎて縣廳の趣旨に合はぬといふな

ら、其と取替へて此方を保存して貰いたいやうな實例に次の如き話もある。

竈神之由來

昔々爺と婆があつた。爺は山に柴刈りに往つて、大きな穴を一つ見付けた。こんな穴には悪い物が住むものだ、塞いでしまつた方がよいと思つて、一束の柴を穴の口に押込んだ。さうすると柴は穴の栓には爲らずに、する／＼と穴の中に入つていつた。又一束を押込んだが其通りで、それからもう一束もう一束と思ふうちに、三月の間に刈つた柴を、悉く穴へ入れてしまつた。其時に穴の中から、美しい女の人が出て来て、澤山の柴を呉れた禮を言ひ、一度穴の中へ来てくれと言ふ。あまり勧められるので、つひ入つて見ると、中には目の覺めるやうな立派な家が有り、其家の脇には爺が三月かゝつて刈つた柴が、ちやんと積重ねてあつた。御馳走になつて還つて來る時、此を遣るから連れて行けと言はれたのが一人の子

供であつた。何とも言へぬ見とも無い顔の、臍ばかりいぢくつて居る兒であつた。是非くると言ふから到頭連れて還つて家に置いた。あまり臍をいぢくるので、爺が火箸でちよいと突いて見ると、ぶつりと金の小粒が出た。其からは一日に三度づゝ突くと臍から出て、爺の家は富貴になつた。ところが婆は慾張りの女で、もつと多く金を出したい爲に、爺の留守に火箸を持つて、子供の臍をぐんと突くと、金は出ないで子供は死んだ。爺が戻つて之を悲んで居ると、夢に其子供が出て来て、泣くな爺様、をれの顔に似た面を、毎日よく眼に掛る所に掛けて置け、さうすれば家が榮えると教へてくれた。子供の名前はヒョウトクと謂つた。それ故に此邊の村々では今日迄、醜いヒョウトクの面を木で作つて竈の上に掛けておき、之を江刺郡では「かまぼこけ」とも呼んで居る。

改造の歩み

瀬澤(ヲツザハ)の佐藤氏は、農家で漁業家で且つ役場の書記をして居る。大きな昔風の家である。後の岡が一帶に海の際まで、無数の土器石器と之を使用した人々の埋没地であることを知らずに、久しい歳月の間之を耕して暮して居た。世の中の變らうとする近頃に爲つて、色々の學者が訪ねて来るやうになつたのだからである。

十九年前の普請と謂ふが、元の地形に元の手法で、以前の材が多分に用ゐてある。栗の木其他の天然の曲線が眞率に利用せられ、殊に勝手の上の隅虹梁は立派な裝飾である。江刺地方で童話に爲つて居る竈神のヒヲトコの木の面が、通例掛けて置かれる場處である。自分は此臺所に腰を掛けて、杵や臼の話をした。

氣仙の村々に今も用ゐらるゝ手杵の功用を尋ねて見た。即ち上下に頭の有る眞直な杵のことで、我々が分り易い爲に、平素兎の杵などゝ名づけて居る所のものである。兎の杵は十何年前に、天草下島の大江あたりで、麻紋附の不斷着の老女が使つて居るのを見て喫驚したまゝであるが、此邊の農家では今も只の普通の器具である。餅搗きには二本で搗くこともあると謂ふ。之に對して柄の長い方の杵を打杵と呼んで居る。打杵は重いからなどゝ謂ふのを見ると、是には大小の種類は無いものらしい。

佐藤氏の土間には此以外に猶二通りの臼がある。曰く石の挽臼、曰く入口右手の地唐臼である。此新舊の雜居が可笑しいと思ふと、村には更に第五種の賃春き白屋が有ると謂ふ。爰は半島で流れが無いから所謂水車では無いが、電氣を動力にして多數の杵を動かして居るので、兎の杵が重寶がられるやうでは、此方は丸